

町民参加の町史づくり



竹富町史だより

2002・9・30

第22号



竹富町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地
TEL・FAX兼用(09808)2-9985

目

次

『写真にみるわが町』	21
千立の農村風景	
『記念碑を訪ねて』	4
網取村跡の碑	
崎原當貴の歩んだ道	
崎原毅	
『御嶽めぐり』	19
三離御嶽・兼真御嶽	
「西塘とその時代」論争（下）	
—西里・狩俣往復書簡	
収蔵図書紹介	
業務日誌	
編集後記	

50 47 44 7 6 3 2 1

●表紙の写真●

西表島南西部の網取村は風光明媚な集落で、琉球王府時代から明治、大正を経て昭和40年代まで存続していたが、本土復帰を前にした1971年（昭和46年）廃村となった。古くから“陸の孤島”などと呼ばれ、交通手段は海路に頼らざるを得なかった。網取小中学校は廃村になった同じ年の3月23日、閉校式を行い、児童生徒は母校に別れを告げた。写真は終業式を同時に開催された閉校式後の記念撮影の様子である。



干立の農村風景

西表島西部にあり、祖納と同様古い集落である干立。与那田川を挟んで隣の祖納とは兄弟村の関係を保つ。両村とも節祭、豊年祭になると、村びとに加えて村を離れた郷友らも多数参加して賑わう。集落名は「干立」だが、戦前に「干」の文字が干し上がるに通じるので好ましくない、として部落会で「星」に変え、「星立」と改称した経緯がある。今では両方の名を使用している。海岸から見る夕陽は絶景である。

村名は『宮古八重山両島絵図帳』(一六四七年)に「高武百石九斗六升四合九勺六才 ほし立村」と記され、古集落であることが分かり、村建ての由来が今に伝わる。集落は栄枯盛衰を繰り返して現在に至るが、一八九三年(明治二六)、西表島の村落を踏査した笹森儀助は、干立村を数十年後に廃村するだろう、と断言している。しかし、笹森の予言は当たらなかつた。

与那田川の北側に位置する干立の集落は、静かな佇まいをみせ濃緑の樹木が村を覆う。村びとは、ほとんど農業で生計を立て、稲作などに精を出す。村の周辺には水田が広がり、王府時代には西表和紙が作られていた。茅ぶき小屋があり、遠くに水田が見られ、鶏が作業場の周囲で餌を求めて動き回る。かつてどの家でも鶏を飼育していたが、放し飼いされ家族と「共同生活」だつた。杵、臼は生活の中から消え、民具として博物館入りとなつた。



杵、臼を使って夫婦で何をついているのであろうか。のどかな光景だ。

網取村跡の碑

西表島南西部の網取村跡に建つ記念碑である。同碑は村出身者が、自分たちが生活した故郷に証を刻み、後世に伝える願いを込めて建立、一九九七年（平成九）八月三十一日、除幕式と祝賀会が挙行された。建立した「うるち会」は、村出身からなる郷友組織で、お互いに親睦交流を深めている。記念碑は、網取村を意味する方言である「あんとうり」と彫られた大文字の石碑が建ち、台座には碑文が刻み込まれている。碑文は以下の通り。



網取村跡の海岸に建つ記念碑

網取村跡の碑

網取村は西表島の最南端に三百余年の歩みを残した。耕地や交通の不便と人頭税の重圧に耐えて村人は父祖の築いた繁栄を守ってきた。しかし、政治の貧困による経済の行きづまりと医療、教育の不備を始めとする孤島苦がつのり、ついに昭和四十六年七月十四日に全員離島を余儀なくされた。ここに私たちは全体の祖先の靈を祀り、四散した村人のよりどころとするためこの碑を建てる。

平成八月九月吉日

うるち会建立

原文は横書きで、御影石に刻まれている。

網取村は、村建て不明だが『宮古八重山両島繪図帳』には、入表間切あミニとり村と見え、高十九石と記す。三間切制移行時には村名が見えず、大浜間切慶田城村に統轄されたと推測される。一七五五年（乾隆二〇）、崎山村が新設されると、網取村は崎山村の管轄となつた。一八九六年（明治二六）、笠森儀助が同村を訪れているが、彼が記した『南島探訪』には「崎山村枝村字網取へ上陸、該村戸数十一人口六十八内男三十五人女三十三人該村ハ風土病地ニ拘ハラス今ヲ去ル十三年以前ヨリ三戸ヲ増殖セリ或ハ人口繁殖ノ兆トナスヘシ地勢土質ノ如キハ本村崎山ノ条下ニ併記ス」とある。由緒ある歴史を刻んできたが、碑文のとおり一九七一年（昭和四六）、廃村になつた。網取小中学校は翌年三月、閉校式を行い、七十三年の歴史に終止符を打つた。

記念碑は、砂浜が続く海岸線に建ち、集落跡を見守つているようである。碑の周囲には芝生が敷き詰められている。

崎原當貴の歩んだ道

崎 原 穀（南嶋民俗資料館館長）



崎山村頭を務めた崎原當貴

私が幼少の頃、わが家を訪れる年寄たちは、崎原家を「サキバル」と呼んでいた。崎原家は元来、旧宮良殿内の分家の十世當衛のもとへ當貴が養子となり、後に宮良姓より改姓、崎原姓を名乗つたようである。伝承によると、當貴は元服の時、尊敬する上司から崎原姓を賜つて改姓した、と言われる。一八九八年（明治三二）、西表古見村の村頭の要職にあつたが、そのことから崎原家の屋号は「クンヌンヤ」（古見の屋）と呼ばれるようになつたようであ

る。崎原當貴は一八四六年（道光二六）十月二十三日、大浜間切大川村八十八番地、旧宮良殿内九代当主、宮良當恭（西表首里大屋子）の四男として出生。長男、宮良當宗（後の宮良間切頭職）、次男、大濱當行（後の崎枝首里大屋子）、三男、宮良當意（後の真栄里首里大屋子）を兄として持ち、當貴は一八八〇年（明治一二）、崎枝与人を振り出しに、各地域の与人職などを務めた。兄弟共々、当時の有力者であった。そのなかでも、當貴は特に学識に優れていた。

当家に残る資料のなかに、松茂氏當貴の記した履歴書がある。同書を解説すると、一八六〇年（咸豐一〇）一月一日、「日帳方加勢申付候事」として八重山藏元から辞令を受け、初めて公務に就いている。当時、十四歳の年少だった。一八六一年（咸豐一一）一月一日、惣横目方に配属となり、勘定座、耕作筆者などを経た後、一八七四年（同治一三）二月二十九日、「御檢使係筆者申付候事」として辞令を受け、同年十月十一日、「御檢使係筆者勤務中職務勉励候ニ付其勲功トシテ勤星千日給与ス」とされている。その年に當貴は公務を終えて、首里から石垣へ帰郷する途中、台風に遭つて船が破損、鹿児島へ漂着している。その後、長崎に滞在し、オランダ人に写真を撮つてもらつた。これが八重山に現存する最も古い湿版写真である。現在、写真は崎原家で大切に保管している。

当時の「小学四書詳解箱」に鹿児島漂着の年月日の記録があり往時の様子が窺える。記録をみると、當貴は漂着時、三十八歳だ

ある。

つた。當貴が遭遇した戊年の台風は八重山の歴史上、稀にみる大型であつた。以後、履歴をみると、「明治八年六月四日、書筆稽古ノ為、那覇へ出張、同年十月十一日、書筆稽古相遂候ニ付其勲功トシテ勤星千日給与ス、明治九年一月一日、勘定座筆者申付候事、同年九月十一日、問合方筆者足勤務中、職務勉励候ニ付其勲功トシテ勤星三百日給与ス、明治九年八月、桃原目差申付候事」と職務に精励している。

當貴は『必要書』と同種類の日記である『目差役被仰付候以来日記』を残しており、大川目差に転じるまでの経緯を記している。数多くある八重山の古文書類のなかで日記、日誌の資料はあまり多くない。『必要書』をみると、當貴の几帳面な一面を窺い知ることができよう。當貴の経歴を垣間見ると、一八七八年(光緒四)三月、筆者、目差より、同年九月には大目差へと出世、一八八〇年(明治一三)十一月には崎枝与人として沖縄県庁から辞令を受けている。一八八三年(明治一六)、「藏元勘定座申付候事」として藏元へ戻り、石垣間切崎枝村詰を命じられ、与人で二度目の勤務を終えている。その後、同年七月四日、大浜間切大川村詰を命じられ、大川与人になつていている。

當貴は大川村の与人時代に井戸堀りに関わっている。大川村には数ヶ所の井戸があるが、古井戸の話になると必ず當貴の名が出てくる。大川村に世持井戸(ユムツンガ)があるが、これは當貴の先祖である松茂姓八世當演が同村に世持役に指示して掘らせた井戸であることからその名がついている。當演は「世持井節」または「白保節」を作った人物であり、音楽の素養もあつた。

大川村の古記録によると、村には當貴が掘らせた田補佐井戸がある。大川与人になつた時に田補佐役に命じて掘らせたのがこの井戸である。伝承では、現在、字大川の宮良眼科医院の東方に位置する東ぬ井戸(アーヌカ)も當貴が掘らせた井戸である。同井戸は古くから寅ぬ方ぬ井戸(トラヌファヌカ)と称された大川村の井戸とともに、共同井戸の役割を担っていた。大川村には井戸に関する歌謡があるが、「東ぬ井戸節」と「田補佐井戸節」は當貴の作である。この二つの節歌が崎原記と綴られていることから、當貴は当時の教養人だつたことが窺える。

大川村は往古から水の豊かな地域で、大干ばつがあつても井戸水は枯れることはなかつた。そのことから、その思いを込めて「フーガーミズル」と言い、村の色を水色に定めている。崎原家では家に伝わる家紋も水を表した紋だといわれ、當貴が与人を拝命した頃に図案化したものとのようである。「明治二十二年一月十八日、九州共進会懇代人トシテ二度ニ亘リ大分県へ出張候ニ付其特別賞トシテ八重山島役所ヨリ勤星式千日給与ス」との記録があるが、明治二十年から三度も大分県へ出向いているのは当時としては珍しいことで、本土の事情に詳しかつたため當貴が選ばれたのではないか、と推測する。

當貴はその後、一八九一年(明治二四)十二月二十三日、そして翌年上半期に八重山藏元、那覇旅館(藏元の出張所)在勤を拝命、一八九四年(明治二七)、日清戦争が勃発したが、その年の一月九日、県庁に反抗したため免職となり、以後三年間失職の身となつた。後になつて八重山島高等小学校及び尋常小学校の生徒共

授業料一八八八年（明治二二）から一八九六年（同二九）まで「未

納取立係申付候事」として学校関係の仕事に従事、一八九七年（明

治三〇）一月二十一日には「八重山郡与人ヲ命ズ」として沖縄県から辞令交付を受け復職、同年二月一日、八重山島府から石垣間切新川村詰を拝命、そして同年四月一日、大浜間切崎山村頭を命

じられている。給与は崎山村頭の時、「月俸金拾壹円」だった。

崎山村頭の後、一八九七年（明治三〇）十月二十日には石垣間切の仲間村、南風見村、宮良間切の古見村、高那村の村頭の兼務、

履歴書の記録はこの辞令で終わっている。

當貴は、残した古文書の筆跡をみると達筆だった。加えて美崎御嶽の篇額や、古見村にある三離御嶽の聯を奉納したりするなど信仰心の厚い人であった。また、自分の所持品には必ず「松茂氏當貴」と記すなど、細かい性格の持ち主だった。晩年、當貴の五男當好（私の祖父）の案内によつて當貴夫婦は博覧会を見物するため、台湾旅行に出掛けている。當貴の住んだ家屋は現在、南嶋民俗資料館として広く一般に公開され、その写真や古文書、遺品などを展示している。屋敷囲いの石垣やフクギは古い時代の八重山の面影を今に残している。庭園にある椿は、鹿児島へ漂着した時に苗を持ち帰つて植栽し、現在のように大きくなつた、と伝え聞く。毎年一月末になると、花が咲き誇り、訪れる人びとに安らぎを与えてくれる。

當貴の生きた時代は、琉球王国から琉球藩、廢藩置県、旧慣温存、人頭税廃止などがあり、沖縄世替わりの時代だった。このようないい時代を生き抜いた當貴は一九二四年（大正一二）、七十七歳の

生涯を閉じた。

※本稿は、「竹富町史」第十巻資料編「近代2」に掲載した「必
要書」を記した崎原當貴の人物像を、曾孫の崎原毅氏に執筆し
てもらつたものである。

（注）

①日帳方（ひちょうほう）

藏元機構のひとつ。文書の收受、審査、往復などを担当する部署。

②惣横目（そうよこめ）

宮古・八重山の藏元に設置された役職。風俗、治安を監視する。

③勘定座（かんじょうざ）

藏元機構のひとつ。諸会計係を担当した。

④勤星（つとめぼし）

役人などは一日勤務すれば星ひとつと計算され、特別な功績があれば加算される仕組み。勤務考課の基礎となる。

⑤問合方（といあいほう）

藏元機構のひとつ。公文書の起草、上申などを担当する。

⑥美崎御嶽（みしゃぎおん）

石垣島にある旅の平安を祈る御嶽。オヤケアカハチの乱（一五〇〇年）後、永良比金の職についた真乙姥が美崎山に建て、靈地にしたといわれる。『琉球国由来記』にある公儀御嶽。

⑦三離御嶽（みちやーりおん）

豊年祭の時に出現するアカマタ・クロマタ神事の発祥の御嶽。『琉球国由来記』にあり、古来由緒深い御嶽として著名。

三離御嶽・兼真御嶽

西表島東部・古見村の南側を流れる前良川の下流域沿いに建つ両御嶽。拝殿を共有しており、内部にそれぞれ篇額が下がり、神棚を設ける。聯も二つある。イビも別々に構える。八重山の公儀御嶽を



合祀形態をとる三離御嶽・兼真御嶽の神棚

記した『琉球國由來記』巻二十一に載っているが、兼真御嶽は「カメ山御嶽」と記される。両御嶽とも古見村の管轄下にある。三離御嶽は神名が「ナフヲ御嶽」イビ名が「マイヒキヒウモイ」、兼真御嶽は神名が三離御嶽と同じで、イビ名が「カメヤマ大アルジ」。合祀の形態をとつてゐるが、その経緯は未詳である。由来については「由來不相知」とされ、定かでない。豊年祭と正月願いを神行事として行なつてゐる。

古見村は、かつて三離村、平西村、大枝村、与那良村などを統轄しており、首里大屋子が置かれた村だつた。明和の大津波（一七七一年）までは繁栄してゐたが、津波以降は病疫が流行し、さらに飢饉も重なつて疲弊、人口は減少の一途をたどつた。人頭税制下では、村位は石・布とも「上」にランクづけられ、村びとは苦難を強いられた。

拝殿の中央部にある神棚は両側に置かれており、向かって右側が三離、左側が兼真の御嶽となつており、それぞれ香炉一基、神瓶を一対ずつ置く。篇額は右側

に「三離嶽」、左側に「兼真嶽」が掲げられ、聯もある。聯は三離御嶽が「神依人敬増其威」、兼真御嶽が「人頼神靈重其福」と書き込まれている。これは、一八九八年（明治三二）に崎山村頭から、古見村頭に異動し赴任した松茂氏一門の崎原當貴（竹富町史）第十巻資料編「近代2」に収録した『必要書』を残した人物）が寄進したものといわれる。聯に記された筆文字をみると、『必要書』と同様に達筆である。

イビは拝殿の後方にあり広大である。手前に三離があり、数本のクバのもとに敷石を数メートル四方に敷き、その上に石体を背にして香炉が一基置かれている。その左側に「三離神殿」と刻んだコンクリート標注が建つ。後方には兼真でクロツグのもとに敷石を数メートル四方に敷き、その上に石体を背にして香炉が二基ある。左側には「兼真神殿」と刻み込まれたコンクリート標注がある。

周辺一帯には国指定天然記念物のサキシマスオウノキが群生している。同木は板根に特徴があり、高木が目を見張る。

「西塘とその時代」論争（下）

—西里・狩俣往復書簡—

(1) 西塘のアカハチ戦争への関わり方について（アカハチ戦争時の西塘の年齢問題）

西里喜一行

(V) 西里第三書簡

狩俣惠一様

暦の上では立秋ですが、まだ酷暑の日々が続いています。ここ二、三日の間、座間味島での学生たちとの合宿研修へ参加し、帰つて來たところです。学兄も北海道へ戻られた頃でしょうか。

七月二十五日付のご書面、拝受・拝読しながら、返書を差し上げることもせず失礼しています。ご容赦下さい。

一九八八年の拙稿「西塘考」の時点では、山城善三先生の『西塘伝』に依拠してアカハチ戦争時の西塘の年齢を「十代の後半から二十代の前半」と推定したために、戦闘員として首里・宮古連合軍と戦つて捕虜になつたのではないかと考えたのですが、今年二月のシンポジウムで指摘しましたように、「球陽」の記載に拠つて西塘が弘治年間（一四八八年～一五〇五年）に生まれたと理解すれば、アカハチ戦争の時点では一〇歳前後ということになり、戦闘員としてアカハチ軍に参加した可能性は低くなります。しかし、十代前半であれば、現在のアフリカなどにおける民族紛争の実態を見ても、戦闘員として駆り出される可能性がまったくないとは言い切れないようと思われます。

さて、竹富島の歴史の黎明期に關わる諸問題についての学兄との討論を通じて、多大の知見を得ることができ、また大いに啓発されるところがあり、今後ともご教示を仰ぎつつ討論を続けたいと思います。今回は七月二十五日付のご書面で提起された論点に限定して検討することにします。

それに『八重山島由来記』などの「当島へ悪鬼納かなより御征伐の時、竹富島にしたうと云者、召し取られ」云々という記述

にも一定のリアリティがあることを考慮せざるを得ません。アカハチ戦争の時に「召し取られ」たというのであれば、戦闘員として逮捕されたと考えられるからです。従つて、現段階では、私はアカハチ戦争時の西塘の年齢を十歳前後と考えていますけれども首里・宮古連合軍が竹富島へ上陸した際には西塘はアカハチ軍の戦闘員に組み入れられて連合軍を迎撃つ側にいたという見解になお固執しています。

また、アカハチ戦争当時においては個人が集落（集団）を離れて独自に行動することは考えられず、敗者の側の集落（集団）の構成員はすべて一律に犯罪者と見做されたはずですから、西塘が幸本部落（あるいは仲筋部落）の構成員の一人であつたとすれば首里・宮古連合軍に刃向かつた集団の一人、即ち「犯罪者」集団の一人として扱われたはずで、「鬼虎の娘」や「仲屋金盛の二女」たちと基本的に同じ範疇に入ると考えてよいのではないでしようか。

(2) 「アーバー石のユングトウ」の詞章とその「主眼」について
(伝承と史実との関連問題・再論)

アカハチ戦争時の竹富島の人々の動向を暗示する重要な伝承として、私は從来「アーバー石のユングトウ」に注目してきたわけですが、学兄との討論を通じて「アーバー石のユングトウ」の詞章には二種類あつて、その内容に重大な差異があることを知りました。ご教示頂いたことに深く感謝します。

ところで、二つの詞章の重大な差異をどのように受け止めるべ

きかという問題については、私の知る限り、まだ誰も眞面目に検討していないように思われます。そこで、ここでは、伝承と史実との関連を念頭に置きつつ、この問題を検討することにします。

まず第一に、二つの詞章の「重大な差異」を確認しておく必要があります。崎山毅著所収の詞章（以下、「崎山詞章」）の全文は次の通りです。

そーるぬ あーばー達

白浜におーりて あーさ淵に おーりて

首むたい 見りばど 首すらし 見りばど

軍船ど やんぬつせ 人喰い舟ど やんぬつせ

マーガニ道から 走り登り 白金道から 走り登り

穴中なる 穴曲りや すんなあぬ すんまがりや

烟廻るし みりばど

他人ぬ烟や そい明り ばあ烟や 荒れはてて

がーら淵ぬ 大石加那志ぬ前ゆ さーれ

この「崎山詞章」を三節に分かち、章句の追加・入れ替えによつて構成された喜舎場著所収の詞章（以下、「喜舎場詞章」）の全文は次の通りです。

一 ソウルヌアーバーダー 白浜ニオーリテ

アサフチイニオーリテ 北カイ首ムタイ 見リバドウ

北カラクル舟 軍舟ヤンヌセー 人喰舟ドウヤンヌセー

二 真金道カラ 走リ上ブリ 白金道カラ 走リ上リ

後カイトウンケリ 見リバドウ 軍舟アラヌソー

三 煙マールシ見リバドウ 人ヌ煙ヤソイバカリ

バー烟ヤ荒リハティテイ 穴ヌ穴曲リヤ

スンナーヌスン曲リヤ ガーラ口ヌ 大石神ヌ前ニ

ヒサレ！

以上の二つの詞章の「差異」がどこにあるかは、比較対照すれば一目瞭然です。最も重要な差異は学兄が指摘されたように、「喜舍場詞章」の第二節の「後カイトウンケリ 見リバドウ 軍舟アラヌゾー 人喰舟アラヌゾー」の部分が「崎山詞章」にはないこと、さらに「崎山詞章」の「穴中なる 穴曲りや すんなあぬ すんまがりや 煙廻るし みりばど 他人ぬ烟や そい明り ばあ烟や 荒れはてて」の部分が、「喜舍場詞章」の第三節では「烟マールシ見リバドウ 人ヌ煙ヤソイバカリ バー烟ヤ荒リハティテイ 穴ヌ穴曲リヤ スンナーヌスン曲リヤ」と変形していることです。

さて、ここで注目すべきことは、第一に、「崎山詞章」の「穴中なる」以下の部分について、崎山先生は「島の人々がびつくりして、われ先にと洞窟の中に逃げ隠れ、烟にも出ず、そのため烟は荒れ果てて、季節の作物は時期を失し、餓死寸前に追いやられたと解釈しておられるのに対し、喜舍場先生は「喜舍場詞章」の第三節を、「(安心して) 烟を巡視したところ 人の烟はよく整地されてあつたが 自分の烟は荒れ果てて 農作物は 自然の穴が曲りくねつたように草に覆われて曲がり 大谷渡りのゼンマイのようすに草に巻き付いて目も当たらない程であり またガーラ入江に立つてアーバー大石神の前に言上いたします」と解釈し

ていることです。

私は崎山先生の解釈は極めて論理明快ですが、喜舍場先生の解釈は難解極まりなく、ほとんど意味不明のように思われます。なぜ「自分の烟は荒れ果てて」しまつたのかという点についての説明がまったくなく、しかも最後の章句が取つて付けたような不自然さを免れない構成になつてゐるからです。この不自然さは、恐らく「喜舍場詞章」の第二節で「後カイトウンケリ 見リバドウ アラヌゾー 人喰舟アラヌゾー」と、「軍舟」「人喰舟」の襲來を否定してしまつたことによつて生じた不自然さではないかと思われます。学兄が指摘されるように、「笑いを主眼とするユングトウ」として見るならば、確かにこの「アーバー石のユングトウ」の「主眼」は、第二節の「軍舟アラヌゾー 人喰舟アラヌゾー」という点にあるわけですが、それにして「軍舟」ではなく「人喰舟」でなかつたとすれば一体なんだつたのかが示されていないので、全体の構成に整合性がなくて理解し難く、「自嘲のユングトウ」として受け止めるにしても甚だ無理があるようと思えます（もつとも、「崎山詞章」の「穴中なる 穴曲りや すんなあぬ すんまがりや」の部分を言語学的に逐語訳すればどうなるのか、私には分かりかねますので、ご教示いただければ幸いです）。以上、要するに、内容構成に即して検討すれば、「喜舍場詞章」には不自然さが目立ち、変形の痕が見え隠れしているといふことです。

注目したいことの第二は、「崎山詞章」にしても「喜舍場詞章」にしても、いづれも冒頭では主語を「そーるぬ あーばー達」と

三人称複数形で明示しながら、後半では一人称の主語に代わり「ばあ烟」と「他人ぬ烟」を対称的に示しているという点です。主語が途中で転換していることは、どのように解釈すればよいのでしょうか。この「アーバー石のユングトウ」に登場するのは少なくとも「私」と「他人」を含む竹富島の「あしばー達」であつて、ある特定の個人ではないことを確認しておくべきだと思います。つまり、ここに登場する「私」や「他人」は集落（集団）の一員であつて集落（集団）を象徴する存在と見るべきです。とすれば、「アーバー石のユングトウ」は「笑いを主眼とする」特定の個人の「自嘲のユングトウ」ではなく、竹富島の各集落（集団）のある時期の動向を後世へ伝える意図をもつて伝承された「ユングトウ」として受け止めるべきではないでしょうか。

そこで、第三に、「アーバー石のユングトウ」には何らかの「史実」が仮託されていると見るべきか、あるいは「史実」とは全く無縁の単なる「笑話」に過ぎないと見るべきかという問題に踏み込まざるを得ません。喜舎場先生が「喜舎場詞章」に依拠しつつ、「史実」とは全く無縁の「笑話」として受け止められたことは当然であります。喜舎場先生はこの「ユングトウ」の内容の背景については全く解説せず、ただ新里村の美女が「岩石と化してしまった」伝説を紹介し、「竹富島の美崎御嶽の祝詞にこのアーバー石を立神（タチイン神）と称して海の守り女神と崇信している」（『八重山古謡』下 92頁）と指摘しているだけです。これに対して、崎山先生の方は「今から四六五年前の赤蜂の乱で、中山軍の軍船が、おびただしく浮かんでいるのを見て、島の人々がびつく

りして」（『蟻の斧』 603頁）云々と指摘し、明確にアカハチ戦争当時の竹富島の情況を伝える「ユングトウ」であると受け止め、また学兄が紹介されたように、生盛康安翁も「このユングトウはアカハチ征伐のとき、琉球王府・宮古の両軍の軍船を見て歌つたものである」と断定されています。学兄もまた「なるほど、八重山の歴史上、大量の軍船がやつてきたのは、アカハチ征伐のときだけである。そのことを勘案した場合、このユングトウが琉球王府・宮古軍を見て歌つたというのは、当たらずと言えども遠からずである」（『根原カンドウとその時代』『たけどみ』 124頁）と指摘され、崎山・生盛両氏の観点でこのユングトウを受け止めておられたにもかかわらず、現在では「喜舎場詞章」に依拠することによつて、「史実」とは無縁の「笑話」と見る立場へ大転換されたわけですが、七月二五日付のご書面では大転換の理由をインフォーマントの世代差に帰しておられます。「喜舎場詞章」のインフォーマントがより旧い世代に属するから信用できるという理由のようですが（因みに、「アーバー石のユングトウ」についての崎山先生のインフォーマントは誰で、喜舎場先生のインフォーマントはどなたであるのか、両者の年齢差等についてご教示頂ければ幸いです）、一世代や二世代の相違で正反対の趣旨のユングトウへ改変されて伝承されているとすれば、「喜舎場詞章」もまたオリジナルな「ユングトウ」から相当に改変されていると考えざるを得ないわけで、旧い世代のインフォーマントだから信用できるというのは甚だ短絡のように思えます。

も、それはインフォーマントの置かれた歴史的・社会的状況の相違に規定されているからではないでしょうか。私見によれば、「アーバー石のヤングトウ」は、やはりアカハチ戦争後の竹富島の人々が直接経験した歴史的大転換の時期の状況を何らかの形で後世へ伝えたいと意図して伝承した「ヤングトウ」であるけれども、首里王府の統治下に入つた後の時代にあって「史実」をそのままストレートに伝承することは差し障りがあったことから、「笑話」の要素をも加味してカムフラージュしつつ、首里・宮古連合軍によつて荒廃させられた竹富島の状況を「アーバー石のヤングトウ」の中に巧みに謡い込んだものと理解すべきです。このような観点から、「アーバー石のヤングトウ」の内容を再検討すれば、「喜舎場詞章」の場合であれ、「崎山詞章」の場合であれ、「笑話」の要素はカムフラージュ用の煙幕であつて、「主眼」はやはり首里・宮古連合軍の竹富島上陸に直面して右往左往する人々の動向を伝えることにあり、連合軍に抵抗して烟を荒廃させられた集落(集團)と連合軍を受け容れて農業生産を立て直した集落(集團)を対比することによつて、アカハチ戦争当時の竹富島内部の政治状況を語り継ごうとしたのではないでしょうか。

(3) 種子取祭統合の由来伝承と現実の統合時期（統合演出者）の問題について（西塘と種子取祭統合問題）

前便において私は、①種子取祭の統合の演出者は西塘であること、②種子取祭統合の時期は西塘帰郷後の十六世紀前半（もしくは中葉）であること、③西塘は統合を演出するに当たつて一世代

前の根原カンドウを中心とした各集落のリーダーたちを伝承上の配役として登場させたこと、④西塘の種子取祭統合の狙い（目的）はアカハチ戦争を契機とした竹富島内部の対立（感情）を克服し首里王府の統治の下で一致協力させるためであつたこと等の論点を、可能性の高い一つの仮説として提起しました。以上の諸論点については、今後とも検討を続けるつもりですので、忌憚のないご批判を頂ければと願つています。

七月二十五日付のご書面では、「西塘によつて、種子取祭の統一が行われた」とすると「種子取祭は『国仲御嶽』で行われるのが当然だと思われますが、その点いかがでしょうか」とのご指摘を受けましたので、現在の段階での私の見解を開陳しておきたいと思います。

國仲御嶽が西塘によつて創建されたことは疑う余地のない史実であつて、創建の背景と意義について私は、次のように指摘したことがあります。

首里に滞在中石工として名声を博していた西塘は、王国支配層の期待を担つて帰郷するや、竹富島に藏元を創建し、行政機構の整備に着手した。まもなく八重山「諸島の酋長は尽く竹富島に赴き、もつて法令を聴く」ようになつたので、西塘はその配下の「酋長」即ち役人たちを指揮監督しつつ、八重山の「琉球化」を推進するための政治的・経済的条件を確立したと思われる。とはいへ、八重山民衆の王国への反感は全く払拭されたわけではなかつたから、沖縄本島と八重山の結合を強めるための精神的措置も必要で

あつた。かくて、新たな信仰上の対象を創出する必要に迫られた西塘は、竹富島の国仲御嶽に首里の園比屋武御嶽の神を勧請して祭ることとし、毎年「正月朔日・十五日・冬至二、諸役人相集」義務づけた（『琉球國由來記』卷二十二）。国仲御嶽こそは八重山の役人層の琉球意識を醸成する聖域であり、八重山の「琉球化」を推進するセンターであつたといえる（『琉球』沖縄史における「民族」の問題』『新しい琉球史像—安良城盛昭先生追悼論集』一八〇（一八一頁）

国仲御嶽が「八重山の役人層の琉球意識を醸成する聖域」「八重山の琉球化推進のセンター」であつたという私の理解は現在でも変わっておらず、従つて御嶽の機能（歴史的役割）という視点に立てば、国仲御嶽は竹富島の他の御嶽とは明確に区別され、竹富島固有の種子取祭を行うのに相応しい場所ではなかつたと考えざるを得ません。西塘は根原カンドウを主役に据えた種子取祭を演出する必要があつたわけですから、根原カンドウと関わりのある場所（もしくはその近辺）を種子取祭の場所として設定したと見るべきではないでしょうか。西塘以後の役人たちも西塘の遺志を継承したと考えるべきでしょう。

なお、「ピースカン（火の神）」の前で種子取祭を行うために種子取祭を統一したという学兄の論点については、ピースカン（火の神）を持ち込んだ士族層（役人層）が種子取祭統一の演出者だという学兄のもう一つの論点を前提にしておられると思いますけ

れども、誰がいつ頃何の目的で「ピースカン（火の神）」を八重山に持ち込んだのかという問題は解決済みなのでしょうか。ご教示頂ければ幸いです。カイジ浜の蔵元跡周辺には「ピースカン（火の神）」を祭る場所があつたように記憶していますけれども、もし私の記憶に間違いがなければ「ピースカン（火の神）」を八重山へ最初に持ち込んだのも西塘ということになるのではないかでしようか。因みに、帰郷した西塘は「武富首里大屋」（頭職）の肩書きを持っていましたから、れっきとした士族の一員だとみなすべきで、自らも士族意識をもつて八重山統治に当たつたはずです（もつとも、「士族」という概念がこの時期に成立していたかどうかは問題ですが、身分秩序が定着はじめると、首里生活を体験していることも考慮する必要があると思います）。

以上、学兄が提起された問題に則して検討してみました。独断的な推測とみなされる点も多いかと思いますので、忌憚なく批判して頂ければ幸いです。なお、西塘の首里連行から帰郷までの時期の先島の政治情勢、宮古・八重山と首里王府の関係についても、検討したいことは多岐にわたりますが、次の機会に譲りたいと思います。

この書簡もまた七月二十五日付の貴簡とともにコピーして、前例に従つて阿佐伊孫良兄と石垣久雄兄へ送付し、検討して頂くことにしたいと思いますので、ご了解下さいますようお願いします。酷暑なお衰えぬ日々が続いていますので、夏バテしないように、皆々もご自愛下さい。

(VI) 狩俣第三書簡

西里喜行 先生

拝啓

沖之永良部島から戻つて、一週間が経過しました。ご多忙の中早速にもご返事を賜り、ありがとうございます。数多くのご指摘とご指導、詳細なる論述に大いに啓発されました。

先生のご質問にお答えする前に、沖永良部島のお墓のことを少しだけ触れておきます。沖永良部島には、ご存じのように世の主の墓がありますが、その墓は那覇から来た石工が造ったという伝承があります。その伝承では、那覇から来た石工に現地妻がいたそうですが、石工は、その妻が死んだので、妻の墓を立派に造つたそうです。

沖永良部島では、世の主の墓と妻の墓を見ましたが、世の主の墓は古く、妻の墓とされているものは新しいことが、その構造から判断されます。というのは、妻の墓とされているものは、圓比屋武御嶽の石門と同じく、アーチ型の墓ですが、世の主の墓はそれよりも古い型の墓だったからです。地元の案内の方も、これは妻の墓ではなく、地元の統治者の墓であると話していましたが、私もそのように思いました。

しかし、私が興味を持ったのは、「石工に妻がおり、死んだ妻の墓を石工が造った」という伝承です。というのは、竹富島の坊主墓の伝承では、「首里から連れて來た西塘の妻が井戸に身を投げて死んだので、西塘は首里から持つて來た石で、妻の墓を造つた」という話があり、それと同じ構造の伝承ではないかと考えたからです。

そう考えますと、「石工が死んだ妻の墓を造る」という伝承が南島には流布していた可能性があり、坊主墓の話は、その類型に過ぎないという可能性が出て来るからです。これは恰も、「犬の発見した井戸」の話が、仲筋井戸だけでなく、沖縄各地に伝承されているようなものです。そうしますと、坊主墓の伝承は、西塘の実像とは切り離して考へてもよいのではないかと思うと同時に、「沖縄タイムス」に掲載された玉津さんの考えは、西塘の実像とはかけ離れたもので、信憑性に乏しいと思われます。

(1) 西塘とアカハチ争乱の関わりについて

さて、先生がご確認されたとおり、西塘が捕虜として連行された点におきましては私も賛成です。しかし私は、竹富島がオヤケアカハチ側であつたとする先生のご見解とは異なつて、竹富島は宮古の豊見親の配下にあり、首里・宮古連合軍の前進基地として使用されたという考えに固執しています。それ故、西塘が戦争捕虜ではなく見世物的な奴隸として連行されたと考えている次第です。そんなわけで西塘連行は、敵軍または謀反人の血筋を引いた娘である「鬼虎」「仲屋金盛の娘」とは、同じ状況での連行ではないと考えてています。

ところで、先生の主張されている竹富がアカハチ側であつたと
いう論拠には、「波照間屋敷」や「他金殿と崎枝武士との力比べ」
「他金殿と川平力二一ツとの舟漕ぎ競争」などを挙げておられま
すが、「波照間屋敷」については孤立伝承であり、崎枝や川平の
武士の競争は敵対して戦っている伝承です。それ故、これらの伝
承を以て、竹富がアカハチ側にあつたとされるのはいささか無理
があるのでないかと思っています。

むしろ、トゥールングックとトウンナカー(『蠍姫の斧』六七八頁)など
貢(六八〇頁)、あるいはナードー穴(『蠍姫の斧』六七八頁)など
の伝承のほうが、より具体的に豊見親や長田大主と竹富の親密な
関係を示しているのではないでしょうか。また、先生は、トゥー
ルングックはアカハチ争乱後に豊見親が築いた居城であるとお考
えのようですが、それについても賛成しかねます。といいますの
は、子供の頃何度もトゥールングックで遊んだ私の感覚では、ト
ゥールングックは政治を執つたりする居城としては狭すぎる敷地
であり、見張り小屋程度だつたと考えています。つまり、トゥー
ルングックはアカハチ争乱以前に築いたもので、花城から久間原
付近のグックと同時期に築いたのではないかと考えています。

(2) アーバー石ユングトウについて

アーバー石ユングトウの「軍船」「人喰い船」が首里・宮古軍で
あつたとする考えは一貫して変わっていません。その点、私の文
章が舌足らずであつたことをお詫び申し上げます。
そこで、喜舎場詞章について私の解釈を示しておきます。

ソウルヌアーバーダー	ソウルの老女たち
白浜ニオーリテ	白浜に下りて
アーサフチイニオーリテ	浅瀬に下りて
北カイ道ムタイ	北方へ首を回して
見リバドウ	見たところ
北カラクル舟	北方から来る船は
軍舟ヤンヌセー	《敵の》軍船であるなあ
人喰舟ドウヤンヌセー	《敵の》人喰い船であるなあ
真金道カラ	《安心して》真金道から
走リ上ブリ	走り上つて
白金道カラ	白金道から
走リ上ブリ	走り上つて
後力イトウンケリ	後方を振り返つて
見リバドウ	見たところ
軍舟アラヌゾー	《敵の》軍船ではなかつた
人喰舟アラヌゾー	《敵の》人喰い船でもなかつた
烟マールシ見リバドウ	《安心して》烟を巡視したところ
人ヌ烟ヤソイバカリ	人の烟はよく整地され《ていたが》
バヌ曲リヤ	自分の烟は荒れ果てて
穴ヌ穴曲リヤ	自然の穴が曲がりくねつたように
スンナースン曲リヤ	大谷渡りのゼンマイのように曲がつ

て《草に巻きついていた》

そこで、喜舎場詞章について私の解釈を示しておきます。

て《草に巻きついていた》

ガーラ口ヌ

《以上のことを》ガーラ入江に立つ
ている

大石神ヌ前ニ

ヒサレー 言上いたします

アーバ大石神の前に

《》の部分を補つて解釈しましたが、ヤングトウやユンタなどは、ある部分を補つて解釈するのが多く、詞章だけで理路整然となつてゐるのは極めて稀です。また、最後の「ガーラロ」以下の詞章は結びの句ですが、一般的のヤングトウは聴衆に向かって「ユー、ヒサレー」もしくは「ユー」で終わりますが、その際、《以上のこと》をという言葉を補つて訳するのが通例です。

ところで、喜舎場詞章が

烟マールシ見リバドウ

《安心して》烟を巡視したところ

人ヌ烟ヤソイバカリ

人の烟はよく整地され《ていたが》

バー烟ヤ荒リハテイティ

自分の烟は荒れ果てて

となつてゐる部分は、崎山詞章でも

烟廻るし みりばど

烟を廻つて みると

他人ぬ烟や そい明り

他の人の烟は 整地され《ていたが》

ばあ烟や 荒れはてて

私の烟は 荒れ果てて

となつていて、いずれも「他人の烟は整地されていたが、自分の烟は荒れ果てている」となつております、二つの原文に違いはありません。したがつて、崎山先生が「島の人々がびっくりして、われ先にと洞窟の中に逃げ隠れ、烟にも出ず、そのため烟は荒れ果て」と解釈したのは、原文に忠実ではありません。

また、崎山先生が「餓死寸前に追いやられ、中には餓死してア

ーバー石になつたと風刺した語りものであります」と解釈している点にも疑問が残ります。というのは、アーバー石の由来については、上勢頭亨さんの『竹富島誌』民話民俗編の九十二頁に記してあるように、「怠け者の娘が母に連れられて浜に下りたが、急に潮が満ち、娘は老婆に変わり、石となつた」という趣旨の伝説があります。よつて、崎山先生は「餓死してアーバー石になつたと風刺した」と述べていますが、アーバー石伝説を知つてゐる島の島びとに、そのような風刺は成り立たないと思われます。

ところで、西里先生は、アーバー石ヤングトウが三人称で語り出しながら、後半の詞章が一人称になつてゐることをご指摘されていますが、これは卓見であると同時に、私の南島歌謡研究の主要なテーマであります。と申しますのは、この人称転換については、記紀歌謡では八千矛の神語に記載されている程度で、文学発生の重要なテーマとされてきたからです。しかしながら、このような人称転換は、南島ではヤングトウに限らず、ウムイ・クエーナ・ユンタ・ジラバでも頻繁に行われるもので、それについては、拙著『南島歌謡の研究』第四章第三節「物語歌謡の人称」の項でも論じてあります。

次に、崎山先生のインフォーマントについてですが、私が知つてゐる範囲で申しますと、私が子供の頃、祖父の大山功と生盛康安翁がよく、「今日も崎山先生に呼ばれてゐるので、石垣に行く」と言つて、連れ立つて出かけていました。後で、祖父に聞いたところ、「崎山先生は、ヤングトウやユンタや島の古いことを研究しているので呼ばれた。ウイシドウのフツチャ（上勢頭亨さん）

も、よく招かれていたと話していました。

その三人のインフォーマントの中でも、ユングトウを得意としたのは、生盛康安翁でした。よって、アーバー石のユングトウは、生盛康安翁から聞いたのではないかと推測しています。因みに、前便の喜舎場先生のインフォーマントには上勢頭亨さんのおじいさん（上勢頭保久利さん）の世代及び神司をしていた仲盛の婆さんが中心です。

この項の最後に確認しますが、私は「喜舎場資料に依拠することで、アーバー石のユングトウを史実とは無縁の笑話と見る立場に大転換した」ではありません。アーバー石ユングトウは、宮古・首里軍の軍船を語つたものではあるが、その主眼は笑いであるというのが私の基本的な考え方です。アーバー石ユングトウの笑話的性格を指摘することによって、「軍船を見た竹富島の人々が大混乱に陥った」とか、「すべての畑が荒れ果てて餓死者が出た」とかいう深刻な状態まで深読みすることはできないと指摘したつもりです。

そもそも、宮古首里の軍船は、まったく平和で何も知らない島に突然現われたのではなく、既に竹富島では戦争ムードがあり、軍船の出現は予想されたことだつたと考えています。

もちろん、現実の軍船を見て、動搖しないことはないと思いますが、アカハチに敵対する竹富という立場をとる私は、その軍船で島全体が大混乱となり、餓死者が出たという考えには同意できません。

(3) 西塘による種子取祭の統合について

私は、先生のご意見とは違ひ、種子取祭の統合は十七世紀（八世紀頃、石垣島のユカルビトウ（土族）によって、行われたと考えています。しかし、「西塘が種子取祭を統合したとするならば、国仲御嶽で種子取祭は行わるべきだ」という私の見解は先生のご指摘のとおり、早計に過ぎたと考え直しました。

(A) 種子取祭の場所について

種子取祭の場所は、必ずしも根原金殿と関わりのある場所で行われて来たのではないと考えています。その理由は、現在の世持御嶽は、かつてハンタノマイ（拝板の前）と呼ばれていたそうで、祖父によると、その拝板の前では必ず礼拝するようにと土族から強制されていたそうです。その拝板は『竹富島誌』によると、一九二八年に焼かれたとのこと。ところで、その頃、種子取祭は、マイヌオン（清明御嶽＝学校の西隣）で行われていましたが、仄聞するところでは、マイヌオンでの種子取祭は一八九七年の蔵元廃廈、諸役人解職の後に行われるようになったそうです。その理由は、ピースカンをオーセー（村番所）からマイヌオンに移転したからです。しかし、ピースカンをマイヌオンに祀るのはよくないということになり、ピースカンは再びオーセー（村番所）の敷地に移されました。そして、オーセーの敷地のピースカンは、一九三〇年に新しく創建された世持御嶽に移され、その年から世持御嶽で種子取祭を行うようになったと伺っています。

以上のことを勘案した場合、種子取祭はピースカンの前で行うのが通例だつたと考えていますが、川平村でも、「種子取祭には

苗代田のそばの田宿屋という小屋に、自然石三つで竈を作り、それを火の神として拝んだ」そうです。

ご存じのように、ピーヌカンは竈の原形とされる石三個ですが、ピーヌカンには、家庭の竈神として拝むものと、士族たちが信仰したものがあります。士族たちの信仰したピーヌカンは、オーセー（村番所）に安置され、大切にされました。士族たちがピーヌカンを信仰したのは、琉球国王が太陽の子孫であるという観念から、ピーヌカン信仰を琉球の国家的宗教と考えたからです。

八重山士族は、ピーヌカンを土着の御嶽信仰と融合させるべく庶民レベルまでに広げようとしたと思われますが、その一環としての種子取祭の統合があつたと考えています。

というのは、小浜島の結願祭や黒島の豊年祭、あるいは竹富島の結願祭もそうですが、芸能を演じる祭りでは、各部落統合の祭りとなっています。また、種子取祭のもつとも重要な芸能とするホンジャーやジー・キヨンギンは、目の前の役人を意識した台詞が必ず発せられています。

換言するならば、士族は、それぞれの島々の團結力は、島々の土着の御嶽信仰にあることを見抜いており、それらの住民が土着の御嶽信仰に凝り固まることを懼れ、ピーヌカン信仰を広めようとしたと思われます。したがって、アカマターのような秘密結社的な祭りに対しては弾圧することになつたと思われます。

よつて、私はこのような問題を背景として、種子取祭の統合が行われたと考えています。なお、種子取祭の統合については、「南島歌謡の研究」一四二頁～一五〇頁でも私見を述べています。ご

参考いただければ幸いです。

これまでの往復書簡で、先生のお考えとの共通点・相違点が次第に明らかになつてきたように思われます。今回も、いろいろなことを知らないまま、結論を急いだ部分があるかと思いますが、至らない点はご指摘ください。ご教示いただきますようお願い申し上げます。

北海道はすっかり秋の気配ですが、沖縄の暑さはまだまだ続いていると思います。ご健康にご留意され、ますますご活躍ください。ますますご活躍ください。

追伸、前回の書簡は、阿佐伊孫良氏・石垣久雄氏に送つていませんでしたが、今回の書簡と併せてお送りします。ご了解ください。

（平成十三年八月十八日）

(VII) 西里第四書簡

狩俣恵一様

旧盆前に八重山を訪れ、八月二十九日、竹富町史編集の仕事を済ませた後、翌日には竹富島へ渡り、阿佐伊孫良兄に案内してもらつて一日がかりでいくつかの史跡・旧跡を廻つて来ました。旧盆のウケイも済ませ、ようやく一息ついているところです。

八月十八日付の御書簡を拝受・拝読しながら、今日まで返答を差し上げるのが遅れてしまつたのは、如上の事情もありますが、ご指摘を頂いたいくつかの問題について私自身の不勉強を痛感し再検討の時間を必要としたからです。ご了承下さい。

ところで、沖永良部島の「世の主」の墓と「石工の妻」の墓の

調査結果についてのご報告の内、とりわけ「石工が死んだら妻の墓を造る」という伝承が南島には流布していた可能性があるといふご指摘を、興味深く受け止めていますけれども、沖永良部島の石工も西塘という名前で伝承されているのでしょうか、ご教示頂ければ幸いです。ご指摘の問題の検討に入る前に、私の方も竹富島の史跡・旧跡めぐりの感想をお伝えしたいと思います。

竹富島のいわゆる「坊主墓」については、今回実見しましたところ、確かに墓の構造といい、石材といい、竹富島の一般的な墓とは趣が違う特殊な墓のように思われますので、山城善三先生の

『西塘伝』で言及されている「西塘の妾」の墓と考えてよいのかも知れません（もつとも、孫良兄は「西塘の妾」の墓から五十ほど離れたところに「西塘の正妻」と「妾」の関係があると説明していましたので、伝承上の「正妻」と「妾」の関係を考慮するとやや不自然です。連行前の西塘に「正妻」がいたという伝説を信するかどうかは別問題ですけれども）あるいは神職にあつた人（神司など）の墓のようにも思われます。また構造的には、平家の落人の墓と伝えられている「赤山王の墓」と共通しているようにも感じられましたが、この点をどのように説明すべきか測りかねています。「赤山王の墓」の頂上にも宝珠のようなものが置かれていた可能性はありますので、「宝珠」が置かれていることから直ちに琉球国王一族の墓と結論するのは短絡し過ぎるようと思われます。いずれにしましても、いわゆる「坊主墓」が造営された年代を科学的に分析する方法があれば真相を解明する手がかりになるのではないかでしょうか。

今回の調査で、「坊主墓」の他に興味深かつたのは、「アーバー石」でした。記憶の中の「アーバー石」はもつと大きかつたよう思うのですが、今回実見しましたところ、普通の人の身長よりも小さく、腰をかがめた婆さんのように、やや冲合の大石（リール）に向かつてお辞儀しているような感じでした。「アーバー石」の立っている位置とその形は、「アーバー石のユングトウ」の内容を解釈する上で一つのヒントとなるのではないかと思いま

さて、竹富島の史跡・旧跡廻りの体験とこれまでの往復書簡で提起された諸問題をも踏まえながら、竹富島の歴史と文化をめぐる若干の問題について学兄のご見解を検討しつつ、併せて私見を整理・展開することにします。以下、便宜上、学兄のご論考「竹富島の村建て物語」を「狩俣論考」と略称し、私の二〇〇一年二月二八日付書簡を「西里第一書簡」、学兄の三月一四日付書簡を「狩俣第一書簡」、私の四月五日付の書簡を「西里第二書簡」、学兄の七月二十五日付の書簡を「狩俣第二書簡」、私の八月一四日付けの書簡を「西里第三書簡」、学兄の八月一八日付書簡を「狩俣第三書簡」と称することにします。

(1) 史実と伝承の関連問題・三論(「アーバー石のヤングトウ」)
の解釈について

前便の「狩俣第三書簡」におけるご指摘に従い、貴著『南島歌謡の研究』(以下、「歌謡研究」と略称)を再読して、あらためて多くの知見を得ることができました。とりわけ第四章の「南島物語歌謡」には史実と伝承(歌謡)の関係を考える上で示唆的な指摘が多々含まれているように思います。私が注目したいのは、①「南島の物語歌謡は、固定した三人称ではなく、人称の不定・未分化状態でうたわれる」(三七二頁)とか、②「物語歌謡」に含まれる「ヤングトウ」は「歌謡と説話の中間的」位置にあり、「ヤングトウの本来の姿は、(歌う)・(語る)というよりも、(誦む)もので、歌謡と説話の両方の性格を兼ね備えたもの」(三七八頁)

という様式上の特徴もさることながら、③「物語歌謡は村落社会で話題になつた出来事や噂話をうたうことが多いこと」(三三六頁)、④「ヤングトウには牛・星・蛙・鮒・魚・鳥などの動植物や自然などが素材として数多く取り入れられていること」(三八一頁)等々のご指摘です。

とりわけ、「仲筋のヌベマ」の詞章について、「三人称で歌い出しながら、突如として命令表現が出てくるのであるが、命令を下した人はだれなのかこの歌謡は語っていない。しかし、竹富島に伝承されるヌベマの伝説によつて、新城島の役人のもとにヌベマを嫁ぐように命令したのは竹富島の玉得役人であつたことがわかる」(三六九頁)と指摘し、「仲筋のヌベマ」の詞章は竹富島で伝承されているヌベマの伝説を背景としてはじめて整合的に解釈できることを明示されたことに注目したいと思います。物語歌謡の背景には村落社会の重要な問題が伏在し、「ヌベマは、竹富島の村落社会の犠牲者として同情され、この結婚は竹富島における大きな社会的事件として歌い継がれることになった」(三七一页)。というわけですから、ここに示された歌謡と伝承との関係はまた伝承と史実との関係を考える上でも示唆的だと思われます。詞章のなかにヌベマに嫁ぐように命令した役人の名前が出てこないのは、士族(役人)をストレートに批判の対象とすることを憚つたからではないでしょうか。

さて、以上のご教示を念頭に置きながら、「アーバー石のヤングトウ」について、もう一度考察を加えてみたいと思います。
まず第一に、詞章の解釈の問題です。「西里第三書簡」におい

て私は「崎山詞章」と「喜舎場詞章」の相違に注目した際、脱落（あるいは追加）の部分だけでなく、章句の入れ替えがあることに留意しました。即ち「崎山詞章」の「穴中なる 穴曲りや すんなあぬ すんまがりや」の章句が「白金道から走り登り」の後、「烟廻るし」の前に置かれているのに対して、「喜舎場詞章」では「烟マールシ」の章句の最後に置かれていることです。その結果、「穴中なる 穴曲りや すんなあぬ すんまがりや」の章句の解釈に決定的な相違が生じているわけです。つまり、崎山先生は「島の人々がびっくりして、われ先にと洞窟の中に逃げ隠れ、煙にも出ず」と解釈したのに対して、喜舎場先生は「農作物は自然の穴が曲りくねつたように草に被われて曲り 大谷渡りのゼンマイのように草に巻きついて目も当たらない程であり」と解釈されているのです。喜舎場先生の如上の解釈は私には全く意味不明のように思われます。一体、農作物の曲り方の形容として用いられている「自然の穴が曲りくねつたように」というのは、どのような曲り方なのでしょうか。あるいはまた農作物が「大谷渡なあぬ すんまがりや」の章句を解釈すれば、「洞窟生活を強いるのゼンマイのように草に巻きついて」というのは、奇妙な形容、というよりも形容矛盾のように思われます。雑草が農作物に巻きつくというのであれば荒廃した煙の形容として理解できないこともありませんが、それにしてもなぜ「大谷渡りのゼンマイ」を引合に出す必要があるのでしょうか。

私は「アーバー石のユングトウ」の詞章の中のキーワードを「軍船・人喰い船」「他人ぬ烟」「ばあ烟」に加えて、如上の「穴中なる 穴曲りや すんなあぬ すんまがりや」の章句であると考え

ています。この章句をどのように解釈するかによって、「アーバー石のユングトウ」全体の「主眼」のとらえ方が相違せざるを得ないからです。私は崎山先生が「穴中なる」の部分を「洞窟の中に逃げ隠れ」と解釈したのは正解のように思えます。というのは、個人的な体験で恐縮ですが、私は沖縄戦末期に竹富島でグラマンの空襲を避けるために大人達に連れられて洞窟へ入り、何日か洞窟生活を強いられ、その時食糧の足しにするために洞窟周辺の大谷渡りのゼンマイを採った経験があり、島の人々が非常事態に直面した際には自然の洞窟の中に逃げ隠れるというのは当然のことのように思えるからです。自然の洞窟がどこにあつたのか（アイヤルかナーサラか、あるいは別の所だったか）正確に思い出せませんが、五歳の子供であつた私は自由に洞窟の中を立ち歩きできましたけれども、大人達は腰をかがめて移動していたように思います。

以上の個人的な体験を踏まえて、「穴中なる 穴曲りや すんなあぬ すんまがりや」の章句を解釈すれば、「洞窟生活を強いるうちにアツバのように腰が曲り、大谷渡りで飢えをしのいでいるうちにゼンマイのような曲り腰になつてしまつたのです」ということになります。「穴中なる」以下の章句は一人称の詠み手の状態を形容する章句として受け止めるべきであつて、そうしてはじめて「アーバー石」を連想させる章句としての位置と役割を占めることになるのではないかでしょうか。なお、学兄は崎山先生の解釈を「原文に忠実ではありません」～「狩俣第三書簡」と批判していますけれども、如上の「穴中なる 穴曲りや

すんなあぬ すんまがりや」の章句の解釈を、「烟廻るし みりばど」以下の章句と取り違えて、崎山先生の「原文」と「解釈文」を忠実に対応させていたために生じた誤解に基づく批判のようになりますが、いかがでしょうか。

言語学的な観点から、「穴中なる 穴曲りや すんなあぬ すんまがりや」の章句を解釈すればどうなるのか、私には分かりかねますけれども、如上の解釈が成立し得ると仮定して、「崎山詞章」を私なりに解釈すれば次のとおりです。

竹富島の人々がソールの海岸に降りて背伸びして海上を見渡したところ、首里・宮古連合軍の多数の軍船が押し寄せて来るのが見えたので、びっくりしてわれ先にとマーガニ道・白金道から逃げ出して洞窟へ入り、竹富島で戦闘が続いている間、私も洞窟生活を強いられているうちに腰が曲がり、大谷渡りのゼンマイで飢えを凌いでいるうちにゼンマイのような曲がり腰になり、ようやく戦闘が終わつたので洞窟から出て烟を巡回してみましたところ、洞窟に入らなかつた他人の烟は整地されているのに、洞窟生活で烟に出られなかつた私(たち)の烟は荒れ果ててしまつて作物がなく、私は餓死してアーバー石になつてしまつたのですよ。このことをソールの大石の神様にご報告致します。

ソールの内側の波打ち際に立つて「アーバー石」に仮託してアカハチ戦争時の竹富島の人々の苦難の情況を伝えようとした「ユングトウ」だと受け止めるとすれば、如上の解釈のように、理路整然と理解できますけれども、「喜舎場詞章」に則して解釈しようとすると意味不明の「解釈」を押し通さなければならなく

なり、笑話としても成立し難いように思われるのですが、いかがでしょうか。

もつとも、「喜舎場詞章」の「主眼」は「軍舟アラヌソ一 喰舟アラヌソ一」という章句にあって、「軍舟」と早とちりした誦み手(一人称)の軽率さを笑うところにあるとの学兄のご見解(「狩俣第一書簡」)は、今回やや修正されて「アーバー石ユングトウは、宮古・首里軍の軍船を語つたものではあるが、その主眼は笑いである」(「狩俣第三書簡」という「基本的な考え方」を提示されています。「喜舎場詞章」に依拠されるのかどうかは明言されていますせんけれども、「宮古・首里軍の軍船を語つたもの」という見解を示されたわけですから、学兄が「アーバー石のユングトウを史実とは無縁の笑話と見る立場に大転換した」(「西里第三書簡」という私の受け止め方も撤回することにします。しかし、「アーバー石のユングトウ」の「主眼」については、「西里第三書簡」で提示したように、首里・宮古連合軍の來襲の際に竹富島の人々がいかに動搖し苦難を強いられたかを示すこと、さらには連合軍を敵軍と見て洞窟へ逃げ隠れた人々と連合軍に服従して迎え入れた人々の運命を対比することが「主眼」であつて、「笑話」の要素は深刻な「史実」を婉曲に表現するための煙幕の役割を果たしているという私の「基本的な考え方」方を再度強調しておきたいと思います。

いずれにせよ、これまでの討論の結果、「アーバー石のユングトウ」がアカハチ戦争当時の竹富島の状況を示す「ユングトウ」であり一定の「史実」を反映しているという共通の認識に達した

わけですので、この共通の認識から出発してアカハチ戦争前後の竹富島の政治情勢を検討することが次の課題となります。

(2) アカハチ戦争前後の政治情勢と西塘の立場（役割）

——連行された西塘は戦争捕虜か見世物的奴隸か——

アカハチ戦争前、即ち十五世紀後半の竹富島を含む八重山の政治情勢については、講演会や研究会で何回か言及しましたし、これまでの往復書簡でも部分的に取り上げましたので、ここではアカハチ戦争当時西塘はどのような立場に置かれていたのかという視点から再検討したいと思います。

まず第一に、十五世紀後半の八重山の政治情勢について考える場合、八重山はこの時期首里王府の版図に入っていたわけではなく、宮古の仲宗根豊見親の勢力下に入っていたわけでもないことに、十分留意すべきです。この点では、学兄も「八重山の歴史の年代が琉球王国の文献にあらわれるのは、一五〇〇年に琉球国王と宮古の仲宗根豊見親の連合軍が八重山を攻めた年であると考えてよい（宮古と八重山が揃って一三九〇年に中山王に入貢したという記述は史実としては疑わしいと思われる）」（『歌謡研究』四五二頁）と的確に指摘されていますので、共通の認識が成立していると理解しています。

如上の認識から出発すれば、十五世紀後半の八重山は首里王府の版図外の地域であつたこと、従つて首里王府にとつてはまだ「未知の地域」に属し、流刑地として利用できる地域でさえなかつたことを確認できるはずです。従つて、尚真王の子を身ごもつた栗

国島の女性をわざわざ「未知の地域」の竹富島へ送り込む必然性がないばかりではなく、送り込むこと自体不可能であつて、五〇〇年後の今日の時点で如上の「伝説」を「発想」すること自体歴史の大状況（現実的諸条件）を全く無視していると言わざるえません。

たた、宮古の豊見親勢力が八重山（西表）と一定の交易関係を形成し、勢力拡張の触手を伸ばし始めていたことも「史実」と考えるべきであつて、十五世紀の七〇年代に与那国島へ漂着した朝鮮人の護送ルートに着目すれば、如上の「史実」を推測することは可能だと思います。『李朝実録』に記載された「史実」を一つの根拠として、私は十五世紀後半の八重山には石垣島勢力圏と西表島勢力圏が形成されていたのではないかという仮説を提起したことがあります。現在でも、私は西表島勢力圏と宮古の豊見親勢力との交易関係が次第に政治的従属関係へ移行し、豊見親勢力が八重山の政治的統一の過程へ介入する足掛かりになつたものと考えていますけれども、論証は先送りします。ただ、ここで注意したいのは竹富島が石垣島勢力圏に入つていたと考えられることです。石垣島勢力圏の最も有力なリーダーがアカハチであったことはいうまでもありません。つまり、竹富島はアカハチ勢力圏に入つていたということです。『李朝実録』記載の朝鮮人の護送ルートから石垣島と竹富島が除外されているのは一つの論拠（状況証拠）となり得ると考えます。

最近では疑問を呈する人もいますが、考古学の分野からアカハチの居城とされる石垣島のフルスト原遺跡と竹富島の花城村遺跡

の共通性（類似性）が指摘されていることにも注目しています（考古学の側からの更なる検討を期待する次第です）。

また、伝承の分野でも、竹富島の「波照間屋敷」の伝承はアカハチと竹富島との関わりを暗示しており、「大浜村のタナジヤラ」が竹富島の花城村から嫁を迎えたという伝承も無視できないと考えています。学兄は「大浜タナジヤラの花城村からの嫁取」伝承について、「タナジヤラは沖縄的な名前を持つた人物」だから「アカハチ戦争終結後」の話だとされています（「狩俣第一書簡」）が、伝承の背後に伏在する「史実」はアカハチ戦争以前のことを示しているように思われます。花城村の名称はアカハチ戦争後には消滅しているからです。私の知る限り、アカハチ戦争後の絵図には「はればか村」の記載は見えますけれども（慶長年間作製の『宮古八重山西島絵図帳』には波座間村・仲筋村とともに「はればか村」が記載されています）、花城村の記載を見たことがありません。いずれにしても、大浜村と竹富島（花城村）との提携関係には一定の歴史的背景があるものと考えられます。

他方で、学兄が提示された崎枝や川平の「武士」と竹富島の「武士」との競争（闘争）の伝承についていえば、アカハチ戦争以前のなんらかの「史実」を反映していると考えるには無理があるようと思われます。アカハチ戦争以前に崎枝や川平と竹富が競争（闘争）しなければならないような村落間の利害対立が現実に存在したように思えないからです（「西里第一書簡」で想定した仲間満慶と竹富島の「武士」の聞いなどの状況は歴史的現実性がないと考えますので撤回します）。村落のリーダー（武士）は村落と一

体であつたはずですから、リーダーの個人的な利害対立が競争（闘争）の原因になることはありえず、村落間の利害対立があつたかどうかが決定的に重要な要因だとすれば、崎枝や川平の村落と竹富島の村落の間に利害対立の要因を見出すことができない以上、如上の伝説になんらかの「史実」を想定することは困難です。

利害対立という視点から見れば、八重山全体が首里王府や宮古の豊見親勢力と対抗関係にあつたという点を重視すべきです。首里や宮古からの貢祖負担の経済的圧力や信仰生活への干渉という時代の大状況を考慮すれば、アカハチ戦争の二、三年前までは八重山のすべての村落が反首里・宮古の立場に立たざるを得なかつたはずであつて、首里・宮古の圧力に抗しきれなくなつた時点で、面従腹背あるいは協力の姿勢へ転じたと考える方が「史実」により正確にアプローチできるのではないかと思われます。この点で注目したいのは、稲村賢敷先生が紹介している川平の伝承です。

稲村先生は「仲間丘の首領仲間満慶」の部落に言及しながら、次のような伝説を紹介しています。即ち、「伝説に依れば仲間井の清水を飲むために仲間満慶のような傑者が出了たのだといふので首里王朝が使をつかわしてこの仲間井を埋め、更に獅子丘の頂上にあった獅子の頭も中山を呪咀するものだと称してこれを破壊したと伝えられる」（『琉球諸島における倭寇史跡の研究』二八八頁）と。

如上の伝説によれば、仲間満慶とその配下の部落は反首里王府の立場を堅持していたようで（もつとも、稲村先生は仲間満慶を反アカハチの立場だと想定してこの伝説の内容を読み換えていま

すが）、最後までアカハチと共に戦線を張っていたことになりま
す。アカハチ戦争後に仲間満慶が首里王府の論功行賞の対象にな
つてないこと等を勘案すれば、如上の伝説は「史実」をより正
確に反映しているように思えるのですが、いかがでしょうか。竹
富島の他金殿に率いられた花城村の人々も、アカハチと共に戦線
を張つて首里・宮古連合軍を挾撃する態勢を整えていたと考える
こともできるのではないかでしようか。石壁をめぐらした花城村の
遺跡とフルスト原遺跡の共通性は如上の「史実」を物語る証拠の
ようと思えます。

首里・宮古の圧力が強まるにつれて、アカハチ戦争の二～三年
前から、八重山内部の各村落の間で対応策（選択肢）をめぐる微
妙な差異が生じ始め、竹富島でも首里・宮古の圧力に対する対応
策Ⅱ選択肢（徹底抗戦か、面従腹背か、積極呼応か）をめぐつて
対立が生じたことについては、「西里第二書簡」において指摘し
ました。学兄もまた「アカハチ戦争前の竹富島には、親アカハチ
の仲筋と反アカハチの花城・波座間勢力があつた」と、西塘が
「アカハチ側に立つて制圧された仲筋村」に属する「少年」であ
つたこと（「狩俣第一書簡」）を指摘していますので、竹富島全体
が首里・宮古勢力圏に組み込まれていたわけではなくアカハチ側
の勢力も確実に存在したという認識は共有されていることを確認
しておきたいと思います。ただ、対立の構図（勢力関係）について
の認識が異なるだけです。

如上の認識を前提とすれば、「アーバー石のユングトウ」にも
アカハチ戦争当時の竹富島の人々の動向がかなりリアルに反映し
て描き出していますけれども、その論拠は花城村の他金殿と波

でいることを読み取ることができるはずで、また「ナード穴」の
伝承の中の「宮古の武士」も実は竹富島のリーダーの一人即ち根
原金殿と考えた方が合理的だと思います。アカハチ戦争直前の情
勢を勘案すれば、根原金殿と長田大主が「秘かに」連絡を取り合
つていた可能性を想定することができるからです。

以上のような伝承や「史実」は、アカハチ戦争前に宮古の豊見
親勢力が竹富島のアカハチ勢力の存在を無視してトゥールングツ
クやトウンナカーを構築できる状況ではなかつたことを示してい
ると言えざるを得ません。とすれば、竹富島を首里・宮古連合軍
の拠点であつたと考る学兄の前線基地説も成立の根拠を失うわ
けですけれども、さらに戦略的な視点からアプローチした場合で
も、自然条件を考慮して一定の期間多数の戦艦を停泊させること
のできる良港は竹富島には見当たらず、むしろ首里・宮古連合軍
に協力的姿勢を示していた慶来慶田城用緒や長田大主の居住地
(西表島)を前線基地として利用したと考る方が合理的だと思
われます。アカハチ戦争後の論功行賞において、慶来慶田城用緒
は西表首里大屋子に、長田大主は古見首里大屋子に任せられてい
ることも一つの状況証拠です。因みに、竹富島のリーダーの中では
根原金殿が宮古の豊見親の「供侍」になつただけで、他金殿以
下五名のリーダーたちは誰一人論功行賞の対象にならなかつたこ
とに留意すべきです。

アカハチ戦争前における竹富島内部の対立の構図については、
学兄は「親アカハチの仲筋と反アカハチの花城・波座間勢力」と
して描き出していますけれども、その論拠は花城村の他金殿と波

座間村の根原金殿がいすれも宮古系統の名前を持つていることにあるようです（「狩俣論考」および「狩俣第一書簡」）。けれども「金殿」という名前はすべて宮古系統とみなし、親首里・宮古勢力と位置づけることができるのでしょうか。抑も他金殿や根原金殿は自称なのでしょうか、それとも他称なのでしょうか。他称だとすれば同時代の人々からの他称なのでしょうか、それとも後世の人々から他の他称なのでしょうか（仲宗根豊見親の命令で木材伐採に動員された西表島の人々が、その死去のニュースを聞いて大喜びし、木材を打ち捨てた場所を豊見親柱川原（トウイミヤーパナカーラ）と名付けたという伝承も参考にすべきです）。名前だけでその社会的・政治的位置を確定することができるのかどうか、私は留保せざるを得ません。

竹富島内部の政治的対立の構図は種子取祭統合の由来伝承に基づいて検討すべきだというのが私の基本的な考え方です。種子取祭統合の由来伝承の歴史的意義については「西里第二書簡」でも提示しましたが、要するに、由来伝承のなかにはアカハチ戦争前後の竹富島の政治情勢が刻印されているということです。この点については、学兄もまた「六人の神たちの種子取祭の日取り争いは、単なる農作物の豊凶の問題ではなく、竹富島全体の統治者としての資格を得るために争いを象徴しており、六御嶽の神々による種子取祭の統合は、竹富島の祭祀権の問題であるとともに、村落の政治的な統合という役割をも果たしている」（『歌謡研究』一五〇頁）と指摘されていますので、種子取祭統合の演出者が誰であるのかを除けば、竹富島の歴史上のある時期の政治情勢を反映

した「史実」とみなす点で私の見解と一致していると受け止めておきたいと思います。ただ、竹富島の歴史上の最も重大な転換期はアカハチ戦争の時期ですので、私は由来伝承に刻印された政治情勢をアカハチ戦争前後の「史実」と受け止めているわけです

さて、種子取祭の由来伝承によれば、根原金殿と幸本節瓦の対抗を軸として、新志花重成は根原金殿寄り、他金殿・久間原発・塩川殿は幸本節瓦寄りということになっています。この対立の構図をアカハチ戦争前後の政治情勢に投影してみると、首里・宮古連合軍に逸早く協力的姿勢を示した玻座間村の根原金殿は、面従腹背の姿勢を採つていた仲筋村の新志花重成に圧力をかけつつ説き伏せて味方に引き入れ、ついで首里・宮古連合軍の直接支援の下に徹底抗戦派の幸本節瓦を屈服させ、幸本節瓦と協力関係についた他金殿ほか三名をも服従させることに成功し、その後根原金殿自身は八重山統治の拠点を竹富島に置いた宮古の豊見親勢力の「供侍」としての地位を保証されたという構図が浮かび上がつて来るようと思われます。アカハチ戦争のなかで、根原金殿が首里・宮古連合軍に協力的であつたことは確かだと思いますけれども、根原金殿の率いる玻座間村の人々もすべて首里・宮古連合軍を援軍と受け止めたのかどうかは明らかではなく、また多くの島民が首里・宮古連合軍を敵軍と受け止めて逃げ回つたことは「アーバー石のユングトウ」によつて伝承されている通りです。

ここで注意しておきたいことは、稻村先生が紹介している根原金殿についての伝承です。その伝承によれば、「竹富島には日本から鍛冶が来て住んでいたという伝説がある。彼は豪力無双で島

民をこき使つたので島民は彼を恨んだが、彼は強力の上に全身黒鉄で出来てゐるので如何ともする事が出来なかつた。彼は又与那国島に渡り暴力を振つたが、彼の妻は彼の頸部に僅か許り肉で出来た所がある事を知り、其の睡眠中に匕首で其の頸部を刺して彼を殺し島民の憂いを除いたと伝えている」（『琉球諸島における倭寇史跡の研究』三一七頁）ということになつています。如上の伝承の中の「鍛冶」なる人物が根原金殿に他ならないことは、一読して明らかですが、ここでは根原金殿は島民から恨まれ怖れられた人物として伝承されているわけです。この伝承をどのように受け止めるべきか速断を慎みたいと思ひますけれども、この伝承は竹富島の人々の根原金殿に対する評価がアカハチ戦争前後においては必ずしも肯定的ではなかつたこと、従つてまた波座間村でもすべての人々が根原金殿に従つたわけではないことを暗示しているように思えます。

その一方で、根原金殿の立場に立つてみると、竹富島に上陸して戦闘態勢に入つてゐる首里・宮古連合軍の攻撃から島民を守るために連合軍に対して協力的な姿勢を示し、他のリーダーの率いる村落に降服を説得する役割を担わざるを得なかつたわけで、根原金殿は首里・宮古連合軍と島民の間に立つて苦悩せざるを得なかつたということになるのではないかでしょうか。

いずれにせよ、竹富島はアカハチ戦争の結果首里・宮古連合軍に占領され、あたかも沖縄戦をぐり抜けた人々のすべてが捕虜収容所に入れられたように、島民の大部分は一時期捕虜として収容されたと思われます。捕虜収容所から選び出されて首里へ連行

された複数の捕虜のなかの一人が西塘であつたわけで（この場合、西塘が直接の戦闘員であつたかどうかは問題にならず、アカハチ側の仲筋村に属していたことが連行の一つの理由であつたと思われます）、西塘はある意味では竹富島の人々の生存を保障するための「人質」として連行されたというのが、現段階での私の結論です。連合軍の総大将（大里）が西塘を「見世物的奴隸」とする目的で連行したとしても、西塘が連合軍に「召し取られた」捕虜の一人であつたという客観的事実を否定することは出来ないと考えます。

(3) アカハチ戦争後の八重山統治と竹富島——豊見親時代・満挽与人時代・西塘時代——

竹富島を含む八重山の歴史の大転換点となつたアカハチ戦争は琉球列島の政治的統一の重要なステップでもあつたわけですが、首里王府の支配下に組み込まれた後の八重山の政治情勢がどのように展開したのか、同時代の一次史料によつて解明することは極めて困難というよりもほとんど不可能のように思えます。しかし、利用できる文献史料や伝承資料等を徹底的に検討することによって十六世紀以後の八重山（竹富島）の歴史の実像を、かなりの程度正確に描きだすことができるのではないかと考へています。むろん、そのためには歴史学の分野だけでなく、考古学・文学（歌謡学）等々の学際的な共同研究が必要であり、学兄らの研究に大いに期待する次第です。ここでは学兄が提起された論点を踏まえつつ、歴史学の分野から私の関心に則して若干の論点を提示し、

学兄をはじめ関心のある方々の批判・検討を仰ぎたいと思います。

①竹富島の村落の再編・統合の問題

アカハチ戦争前後の竹富島には六つの村落が存在したという通説に對して、学兄は幸本村と久間原村はもともと存在しなかつたという見解を提示されましたけれども（「狩俣論考」）、私には十分納得ができませんので、とりあえず通説に従うことにします。も

つとも、私はアカハチ戦争後も六つの村落がそのまま存在し続けたとは考えていません。六つの村落はアカハチ戦争を契機に再編統合されたという認識を出発点にしています。つまり、新志花重成配下の仲筋村と幸本節瓦の幸本村は統合されて現在の仲筋村の原型を形成し（新志花重成の配下の旧仲筋村はサージ御嶽近辺から幸本村の方へ移動したとも考えられるのではないか）、東方の三村（久間原村・花城村・波利若村）はいずれも根原金殿配下の玻座間村へ統合されて三村の同族集団の家屋も玻座間村の東側に移動したことです。従つて東方の三村は一旦廃村となつて消滅したわけです。この村落の再編・統合措置は占領軍としての宮古の豊見親の指令によつて強行されたために、かなりの抵抗をともなつたと思われます。とりわけ東方の三村の移動は居住地と生産地の距離を引き延ばし、生活条件を悪化させることにもなつたはずで、統合への不満はくすぶり続けたのではないでしょうが。そのために、西塘帰郷後のある時期に東方の旧村落跡に「はれはか村」を再建することを承認したのではないかと考えられます（『宮古八重山兩島絵図帳』参照）。なお、阿佐伊孫良兄は

十七世紀末には「はれはか村」の玻座間村への再編入・統合問題が竹富島を搖るが大問題となつたことを指摘しています。「竹富島の歴史を掘る（三）」参照）。また、再編・統合に対する不満の緩和策として、六つの村落のアイデンティティの拠り所ともいうべき御嶽を維持あるいは創建させたと考えることもできるのではないかでしょうか。

②トゥールングック（豊見親城）とトウンナカ一（豊見親井）の造営時期と造営者の問題

アカハチ戦争の後、宮古の豊見親軍の一部は戦後処理のために竹富島に駐留しただけでなく、初代八重山頭職に任せられた祭金豊見親（仲宗根豊見親の二男）は八重山統治の拠点として竹富島にトゥールングック（豊見親城）を築いたという私の見解（「西里第一書簡」）に対し、学兄は「トゥールングックはアカハチ争乱以前に築いたもの」という従来の見解を固執し、その理由として「政治を執つたりする居城としては狭すぎる」とことを挙げ、「見張り小屋程度」の建物であつたと想定しています（「狩俣第三書簡」）。

トゥールングック（豊見親城）を竹富島の史跡としてきちんと管理して來なかつたことは最大の痛恨事ですが、十六世紀初頭の時点では中心的な政治機関として機能し得る建造物の敷地としては十分な広さであつたと考えてよいのではないかでしょうか。むろん、中心的な統治機関の周辺には若干の付属機関も配置されています。

ご指摘のよう、トゥールングック（豊見親城）が八重山統治

の拠点として造営されたものではないとすれば、豊見親勢力の統治拠点はどこにあつたと想定されているのでしょうか。統治拠点らしき遺跡は竹富島の別の箇所にあるのでしょうか。それとも竹富島以外の他島に存在するのでしょうか。ご教示頂ければ幸いです。私には豊見親勢力の統治拠点はトゥールングック（豊見親城）以外には考えられません。飲料水を確保するためのトウンナカー（豊見親井）をわざわざトゥールングック（豊見親城）のすぐ側に造営したのも、単に「見張り小屋」の番人用としてではなく統治機関としての建造物に勤務する一定数の人間集団の存在を前提としていたからであると思われます。

トゥールングック（豊見親城）やトウンナカー（豊見親井）の名称が宮古の豊見親勢力と結び付いているとすれば、文献上で八重山頭職として確認されるのは仲宗根豊見親の二男の祭金豊見親と三男の知利真良豊見親ですから、この両人を造営者とみなしてよいのではないかでしょうか。但し、祭金豊見親はトゥールングック（豊見親城）の建設などに八重山の民衆を動員・酷使して不評を買つたために「矜驕自恣」という罪名を着せられてわずか数年で頭職を免ぜられていますので、トウンナカー（豊見親井）を造営したのは第二代頭職に任せられた弟の知利真良豊見親であつたと思われます。トウンナカー（豊見親井）の伝説がその傍証となることは既に指摘した通りです（「西里第一書簡」参照）。

③与那国島遠征と与那国豊見親（ユノントウーミヤー）をめぐる問題

宮古の豊見親勢力が与那国島を遠征した際に、竹富島のリーダ

ーの一人根原金殿が「ユノントウーミヤートウムザー」（与那国豊見親供侍）として従軍したことはすでに学兄が明快に論証されたことですけれども（「ネーレカンドウとその時代」）、私は学兄の論証に依拠しながら与那国島遠征の時期と「ユノントウーミヤー」に当たる人物について異見を提示しておきました（「西里第一書簡」）。

宮古の豊見親勢力の与那国島遠征の時期については、「球陽」には一切記載されておらず（「西里第一書簡」の記述は誤り）、宮古側の史料（『忠導氏家譜』など）に一五〇〇年と一五二二年の二回にわたって遠征したかのように記載しているだけですけれども、私は一五二二年遠征説だけが合理的であると考えています。一五〇〇年遠征説は一般的にアカハチ戦争の直後に「余勢」に乗じて遠征したかのように説明されていますけれども、疑義を呈せざるを得ません。まず第一の疑問点は遠征の大義名分が何であつたのか明らかではなく、当時の与那国島の政治情勢をどの程度掌握していたのかも明らかでないことであり、第二になぜ宮古軍だけが遠征し首里軍は参加しなかつたのかが説明されず、首里軍が遠征を指示（許可）したのかどうかも明らかではないことです。

首里王府はアカハチ戦争後の八重山統治を宮古の豊見親勢力に委任しましたけれども、他方で豊見親勢力が先島全体を足場にして自立傾向を強めることを警戒していましたので（祭金豊見親の与那国遠征を認めることはなかつたはずです）。その意味では、

根豊見親が独断で決断し実行したと考えるべきではないでしようか。『球陽』が与那国島遠征の事実を一切掲載していないのはその一例証です。

もつとも、『球陽』には一五二二年の与那国島遠征直後に、仲宗根豊見親自身が首里へ参上し、宮古の主権の象徴ともいべき宝刀（治金丸）を尚真王へ献上した事実を記載しています。このことば何を意味しているのでしょうか。『球陽』は仲宗根豊見親が自主的に献上したように記述していますけれども、献上した時期が与那国島遠征の直後であることから、実際には独断遠征について首里王府への服従の意思を表明するために献上したと見るべきで、献上後に首里王府は宮古に対する従属化を強力に推進していることも、如上の解釈の有力な傍証となるよう思われます。首里王府の圧力を受けた仲宗根豊見親はまもなく閑死し、長男の仲屋金盛豊見親も悲惨な最期を遂げることは周知の通りです。

以上の史実を勘案すれば、一五二二年の遠征だけが合理的「史実」だという結論になるのではないでしようか。とすれば、わが竹富島のリーダーたる根原金殿が「供侍」として従軍し戦死したのは一五二二年ということになります。では、根原金殿の主人たる「ユノントウーミヤー」とは誰のことでしょうか。

学兄はかつて「ユノントウーミヤートウムザー（与那国豊見親の供座）とは、与那国島遠征に出かけて、ユノントウーミヤー（与那国豊見親）と称された人物のトウム（供）であつたお方という意味である。与那国征伐を行なつたのは宮古の仲屋金盛で、与那

国豊見親とは彼のことと思われる」（『歌謡研究』四五六頁）と指摘されていましたけれども、今年二月の「狩俣論考」以後は与那国豊見親を金志川豊見親とみなす見解を提示されています。しかし、仲屋金盛や金志川は根原金殿と直接の主従関係にあつたわけではなく、根原金殿と直接の主従関係にあつた豊見親は一五二二年の時点では知利真良豊見親（八重山頭職）であつたわけですから、当然与那国豊見親は知利真良豊見親とみるべきであつて、彼以外の人物を想定することは不合理だと思います。

④宮古の豊見親勢力の八重山統治と民衆の対応・評価の問題
アカハチ戦争の戦後処理と八重山統治を委任された宮古の豊見親勢力が、どのような方針で八重山を統治したのかを示す一次史料は少ないけれども、本拠地の宮古にとつて最大のメリットは何かという観点から八重山統治の方針を決定したであろうことは推測に難くありません。アカハチ戦争以前から志向されていた首里王府への貢祖負担を八重山へ転嫁するという方向は愈々現実化されたのではないかでしようか。トゥールングック（豊見親城）やトゥンナカ（豊見親井）の建設費用を含む八重山統治のコストも八重山の民衆へ転嫁されていたはずです。当然、八重山の民衆は宮古の豊見親勢力の植民地的統治に抵抗したと思われます。初代の八重山頭職に任せられた祭金（真列金）は「矜驕自恣にして人民を暴虐す。彼の島（八重山島）の人民、みな疎文を具へて豊見親を中山へ告訴す。即ち頭職を革め去り故郷に撤回せらる」（『球陽』尚真王二四年の条）というのも、八重山民衆の強い抵抗を示す一例です。

『忠導氏家譜』に掲りますと、祭金の頭職在職機関は四年です。免職されたのは一五〇五年のことになりますが、その後任は弟の知利真良豊見親ですから、なお宮古の豊見親勢力の統治時代は継続するわけです。知利真良豊見親は一五二二年の与那国島遠征にも参加し、その二、三年後に父親の仲宗根豊見親が死去した際にはトウンナカーの水を持参して宮古へ帰つたことを暗示する伝説もあることから、一五二五年頃までは八重山頭職を勤めたものと思われます。つまり、宮古の豊見親勢力の統治は四半世紀に及んだわけですが、この間にも八重山の民衆は面従腹背の抵抗を繰り返していたようです。

宮古の豊見親が死去したとの知らせを聞いて大喜びしたという伝承を記録している『慶来慶田城由來記』の一節は、八重山の民衆の豊見親統治に対する評価を示す一例として注目されます。「宮古島之とよめや与申人、おきななし御手内召成不申時分ニ而云々ではじまる一節の口語訳は次の通りです。

宮古島の豊見親という者は、八重山がまだ首里の支配下にならない時分に、宮古島の豊見親が八重山をすべて支配し、何かと従わせていた時、年々、きや木（キャーンギ）・おもと竹・いく木（モツコク）・桑木を家の木材として所望した。それらを取り揃えて積んでいつて納めていたが、今度はまた、蔵の材木としてよし木（イスノキ）を六、七〇本余り、長さ四、五間、太さ五、六尺回りのもの、かし木は一尺四、五寸角の木を所望してきた。やむをえず百姓らを集めて申し付け、仲良山あたりへ行き、山宿りして、御座岳の近辺から右の数を切り、木を山から引き出す人夫

として、男女二、三百人余りを呼び寄せ、道筋の半分過ぎまで引き出した時、村から宮古島の豊見親が死んだとの早使いが来た。

みんなこれを聞いて、大いに喜び、それらの木をそこの川原に打ち捨て、「さらばさらば」と大声で氣勢を挙げ、帰り道に嵩の頂上に登り差声したので、その嵩の名を「ざしこいびり」と名付け、また、木を捨てた川原を「豊見親柱川原」（トウイミヤーバナカーラ）と名付けた。山宿りへ帰り、一夜一日あやく（アヤグ）を歌い、神酒、焼酎で遊んだので山宿を構えた所を「あよはか」と名付けたと伝える（『石垣市史叢書 I 慶来慶田城由來記』四〇五頁）。

この一節の冒頭句では「八重山がまだ首里の支配下にならない時分」の事件を語るかのように裝い、アカハチ戦争以前の宮古の豊見親勢力と八重山（西表島）の関係を示すかのようにカムフラージュしていますけれども、実際には「宮古島の豊見親が八重山をすべて支配し、何かと従わせていた時」、即ちアカハチ戦争後の四半世紀にわたる豊見親勢力の八重山統治時代の事件を語っていると見るべきではないでしょうか。豊見親の死去が重大ニュースとして受け止められたとすれば、仲宗根豊見親や目黒盛豊見親の時代にえられないからです。与那覇勢頭豊見親や目黒盛豊見親の時代に八重山をすべて支配し、何かと従わせていた」ということはありえず、またアカハチ戦争以前の仲宗根豊見親と八重山との関係にしても、この一節に示されるような完全な支配・従属関係ではなく、交易を中心とした協力関係に過ぎず、アカハチ戦争の際に慶来慶田城用緒らが仲宗根豊見親に協力したのも交易のメリット

を確保するためであつたと考えられるからです（如上の伝承から判断すれば、アカハチ戦争の後、慶来慶田城用緒も豊見親勢力に對しては、面従腹背の態度を探るようになつたのではないでしょうか）。

要するに、八重山の民衆が「死去のニュース」を聞いて大喜びしたという豊見親の死去とは仲宗根豊見親その人の死去に他ならないとすれば、豊見親勢力の八重山統治に対する民衆の不満がいかに根強く潜在していたかを示しているわけです。その意味では、豊見親勢力の八重山統治は失敗したと言えるかも知れません。首里王府が豊見親勢力を排除して「満挽与人」を送り込み、直接統治に乗り出したのも、八重山統治の失敗を立て直すためであつたと思われます。他方で、一五三〇年前後から、首里王府の先島従属化政策は強力に展開され、その過程で仲屋金盛豊見親は悲惨な最期を遂げることになりますが、知利真良豊見親の八重山頭職罷免と「満挽与人」による直接支配もまた先島従属化政策の最初の重要な一環であつたと見ることもできるのではないしょうか。

もつとも、「満挽与人」がどれほどの権限を持つていたのか、その統治期間はどの程度続いたのか、いまのところほとんど明らかでないのが残念です。ただ、西塘が帰郷するまでは「満挽与人」の統治が続いていたことは明らかですので、私は一五二〇年代の後半から四〇年代の後半までの二十年前後は「満挽与人」の統治時代であつたと考えています。

⑤西塘の帰郷と種子取祭の統合の問題

アカハチ戦争後の八重山（竹富島）の歴史は豊見親勢力の統治

時代、「満挽与人」の統治時代を経て、西塘の統治時代へと展開するわけですけれども、西塘の統治時代がいつから始まるのか、即ち西塘が帰郷したのは西暦何年のことかという問題は、私が十数年前に通説の一五二四年帰郷説に疑義を提起して以来、未決着のままになっています。「球陽」の記事から一五二四年を導き出すことはできないだけではなく、他の文献の記事をも勘案すれば一五四六年帰郷説の方が合理的であることを、私はこれまでに繰り返し主張して来ましたが、一般的には依然としてまだ受け容れられていないようです。私が一五二四年帰郷説に疑義を呈し一五四六年帰郷説に固執するのは、実は以上に検討したようなアカハチ戦争後の八重山（竹富島）の歴史の展開を考慮すれば、一五二四年の時点で西塘が帰郷できる客観的な条件はないと判断せざるを得ないからです。従つて、現在のところ、私は一五四六年帰郷を前提として、西塘帰郷後の問題を検討することにしています。

種子取祭の統合をめぐる論点もその一つです。既に「西里第二書簡」などで詳論しましたように、種子取祭統合の演出者は西塘である等々の論点については、十分とは言わないまでもかなりの程度論証されていると考えていますので、今後とも論証を補強する作業を続けるつもりです。ただ、学兄が重視しておられる「種子取祭の場所」の問題との関連で、「西塘は根原カンドウを主役に据えた種子取祭を演出する必要があつたわけですから、根原カンドウと関わりのある場所（もしくはその近辺）を種子取祭の場所として設定したと見る」（「西里第三書簡」）私の見解は再検討が必要かも知れません。学兄のご教示によれば、「マイヌオンで

の種子取祭は一八九七年の藏元廃止、諸役人解職の後に行なわれようになつた」（「狩俣第三書簡」とのことですが、一八九七年以前には種子取祭が行なわれた場所、即ちオーセー（村番所）は固定していたのでしょうか。固定していたとすれば、現在のど辺にあつたのでしょうか。一九三〇年に世持御嶽を現在の場所に創建するに当たっては、オーセー（村番所）の跡や坡座間御嶽の位置を考慮したのでしょうか。

いずれにせよ、「種子取祭はビーヌカンの前で行なうのが通例だつた」（「狩俣第三書簡」とすれば、ビーヌカン信仰がいつ誰によつて竹富島へ持ち込まれたのかという論点が重要になつて来るわけですが、この論点との関連で窪徳忠先生の次のような指摘に注目したいと思います。窪徳忠先生は琉球列島におけるビーヌカン信仰の特徴に言及した後、「なお、地頭フイヌカン、村フイヌカン、ヌルフイヌカンなどは、第二尚氏がその支配と權威とを各地に浸透させるための手段または方法として、フイヌカンの信仰を利用しようと考へた結果であつて、本来のフイヌカン信仰とは別に扱うべきであろう」（「中国文化と南島」三五四頁）と指摘されています。

窪先生の指摘を勘案すれば、竹富島の種子取祭の行なわれる場所に置かれたビーヌカンとは「村フイヌカン」のことだと考へてよいのではないかでしょうか。とすれば、第二尚氏の尚真・尚清時代に首里で生活した西塘が、琉球王の「支配と權威」を八重山（竹富島）へも「浸透させるための手段または方法として」、ビーヌカン信仰を持ち込んだと考えることは極めて合理的であるよう

思われます。

先日確認のため藏元跡を訪ねましたところ、ビーヌカンの跡は見つかりませんでしたが、阿佐伊孫良兄の説明によれば、ビーヌカンはカイジ浜の藏元にあつたけれども藏元移転の際に石垣島へ持つて行つたとのことです。とすれば、もともと竹富島の藏元にもビーヌカンは置かれていたわけですから、西塘は種子取祭の統合を演出するに当たつてビーヌカン信仰をも利用したと考えることができるのではないかでしょうか。ビーヌカン信仰も西塘が持ち込んだとすれば、種子取祭統合の演出者が西塘であることは愈々確実になつたと言えるように思います。

以上、長々と饒舌を尽くしてきましたが、思い込みによる独断と偏見も多々含まれていると思いますので、忌憚のないご批判とご教示をお願いします。なお、この書簡のコピーも例によつて阿佐伊孫良兄と石垣久雄兄へ送付し、ご検討頂くことにしますのでご了承下さい。なおまた、ここで、私たち相互の往復書簡を、「西塘とその時代」論争（西里・狩俣往復書簡）（仮称）として、一冊の冊子にまとめ（「狩俣論考」を付録として追加し）、郷里の諸先輩や同学の諸氏に公開して検討して頂くことにしたいと思いますが、いかがでしょうか。冊子の発行についてはなにか良いアイディアがありましたらご教示下さい。

北海道はもう秋の気配が漂つている頃かと思いますが、冬に備えて與々もご自愛の上、益々御研鑽下さい。

（二〇〇一年九月八日）

(三) 狩俣第四書簡

西里喜行 先生

拝啓

北海道では一段と涼しくなり、山々では初雪の便りも聞こえています。現在は、「琉球の伝承文化を歩く—西表島・黒島・波照間島の昔話集」の原稿整理に追われています。

そんな慌ただしい日々の中でも、先生の書簡は何よりも楽しみです。しかしながら、すぐにご返事をと思いつつも、今日になってしまいました。

今回も先生のご見解に対する私見を申し述べ、ご批判・ご指導を賜りたいと存じます。

(1) 沖永良部島の石工伝承について

沖永良部島の石工については、「えらぶの古習俗」(永吉毅著)で、「世之主の墓の築造に当たった石工は琉球から招かれてきた人だ」ということである。巷説によると、「西塘」という沖縄の人だという口伝があるが」と記しています。ただし、著者の永吉さんは「沖永良部島の世之主は北山滅時的人物であるが、西塘は尚真王時代の人物であることから、その口伝は間違いであろう」と記しています。しかしながら、その真偽はさておくとしても、「石工が妾の墓を造つた」という口伝には、坊主墓の伝承との類

似性があり、関心を抱いています。

(2) アーバー石ユングトウの詞章について

ユングトウに限らず、八重山の歌謡は、すべて対句構成であると言われていますが、それは「同じような意味の句を繰り返す」ことです。したがって、「穴なーる・穴曲がりや」と「すんなーるすん曲がりや」は対句構成であり、二つは同じような意味であります。

その前提に立って、「穴なーる穴曲がりや」を解釈しますと、「穴なーる」は「穴にある」で、「穴曲がりや」は「穴曲がりもの」となります。そして、「穴にある穴曲がりもの」とは、穴の形状を表しており、穴の形状は、ギダーサ蟹の穴にしても、一般的の穴にしても、曲がりくねっています。したがって、「穴曲がりや」は、洞穴そのものを指すのではなく、「畑の曲がりくねった雑草」を穴の形のように曲がっていると比喩的に表現しており、喜舎場先生の解釈こそ、正しいと思っています。

また、「すんなーるすん曲がりや」の「すん」について、喜舎場先生は「すん」を「大谷渡り」とあると解釈しておられ、私も「スンムトウ木」(=大谷渡り)という語があることから、「すん」を「大谷渡り」と解釈していました。

しかし、「スン」には「頭」「先」という意味もあります。それで私は、「すんなーる」は「先にある」という意味であると考えるようになります。「すん曲がりや」は「先曲がりもの」で、「すんなーるすん曲がりや」は、「蔓性の雑草の先が、ゼンマイのようにぐ

るぐると曲がつてゐるもの」と考へるようになつています。よつ

て、「穴なーる穴曲がりや」と「すんなーるすん曲がりや」の解

釈は

A 穴なーる穴曲がりや（穴にある穴曲がりもののように雑草が

作物に絡み付いている）

B すんなーるすん曲がりや（先にある先曲がりもののように雑

草が作物に絡み付いている）

と、解釈しています。（傍線部は、両句が比喩的表現であるので私が補っています）

また、「穴にある穴曲がりもの」や「先にある先曲がりもの」という表現は、「穴にある」「先にある」を省いて、「穴曲がり

もの」「先曲がりもの」でも充分に意味はわかります。しかし、ユングトウでは、音調を整えるために韻を踏むときには、屋上屋を架するような表現をします。したがつて、意味的には、「穴なーる」「すんなーる」は、不要な語であると思われます。

要するに、「穴曲がりもの」「先曲がりもの」とは、蔓性の植物が作物に絡み付いて、畠が荒れ果てていると歌つてゐると考へています。

また、喜舎場資料の「後カイトウンケリ、見リバドウ、軍舟アラヌソーチ、人喰舟アラヌソーチ」の詞章は、後に付加されたものではなく、崎山資料のほうがその詞章を脱落させたと考えています。申しますのは、ユングトウやユンタの場合、詞章を付け加えるときは元の詞章の最後尾に付加するというのが通例であり、詞章

の途中で付加することはあり得ないからです。

以上が、アーバー石の解釈に関する私見です。再度申しますと先生と私の間には、詞章の解釈に相違はあるものの、「アーバー石ユングトウ」が、アカハチ戦争を背景として歌い詠じられたものであるという点では一致していると思います。

(3) 西塘は尚真王の子ではないとの先生のお考えについて

先生が「十五世紀後半の八重山は首里王府の版図外の地域であったこと」を根拠として、西塘は尚真王の子ではない述べられてることについては、異論の余地はありません。

(4) 石垣島勢力圏と西表島勢力圏について

『成宗大王実録』の「朝鮮人漂流記」において、彼らが竹富と石垣に立ち寄つていないこと考慮したとき、先生の石垣島勢力圏と西表島勢力圏といふご見解は新鮮で、興味深いお考えだと思います。

ただし、長田大主とアカハチの争いが、その勢力圏の問題と関係があるのかどうかは、いまのところ判断できません。したがつて、私は、宮古の豊見親を後ろ盾とする慶良慶田城用緒と長田大主の勢力がアカハチと対抗し、それ以外の人々はどこに付くべきか迷つていたのではないかと考えています。そのような状況の中で、宮古豊見親が深く関わつてゐたのではないかと思つています。そのように考へる理由の一つは、先生が「宮古の豊見親勢力の八重山統治と民衆の対応・評価の問題」の項目で述べておられる

ことと関連します。

豊見親が西表島民を酷使して材木を切り出した時期は「八重山がまだ首里の支配下にならない時分」と『慶来慶田城由来記』が記したのは、カムフラージュであるとお考えのようですが、私はカムフラージュではなく、記述のとおりだと思っています。

と申しますのは、先生はカムフラージュの理由として、「与那覇勢頭豊見親や目黒盛豊見親が八重山をすべて支配し、何かと從わせていたことはあり得ない」と述べておられますが、材木の切り出しは、必ずしも与那覇勢頭豊見親や目黒盛豊見親の時代とする必要はなく、一五〇〇年直前の仲宗根豊見親であったと仮定しても構わないことであり、また、西表島をすべて支配していないくとも豊見親は島民を酷使して材木を切り出すことは可能だつたと考えているからです。

換言するならば、慶来慶田城用緒が、西表島を掌握していたとしても豊見親の配下がやつてきて、西表島の島民を酷使して材木を切り出せる程度のことは可能だつたと考えているからです。というのは、慶来慶田城用緒の軍事力もしくは防衛力は、豊見親に对抗できるほどのものではなく、むしろ慶来慶田城用緒のほうが豊見親の後ろ盾を必要としていたと考えているからです。

また、宮古諸島を統一し、島外との交易を行なつていたと考えられる豊見親には、造船や家屋建築のための大きな材木を必要としたと思われます。よつて、西表島に比べて強大な軍事力を背景とした豊見親が、西表島民を酷使することは可能だつたと思われます。

二つ目の理由は、伝承では、慶来慶田城用緒が平久保加那按司を討つたと語つてのことです。すなわち、慶来慶田城用緒が、西表島からは遠くにある石垣島北部の平久保加那按司を討つことを計画し、それを実現できたのは、その背後に仲宗根豊見親の意志がはたらいていたと考えているからです。当時、慶来慶田城用緒は西表島を独立的に掌握していなかつたと考える私は、用緒が勢力拡大のために平久保加那按司を討つたのではなく、宮古圏の多良間島に近い平久保を勢力下に置こうとした仲宗根豊見親の意思がはたらいていたと考えています。

以上の二つの理由から、私は、アカハチと長田大主の争乱の原因は、仲宗根豊見親が積極的に八重山全土を支配下に置こうとする意図があり、そのような状況の中で、長田大主と慶来慶田城用緒は豊見親に従つて、アカハチと戦つたのではないかと考えています。すなわち、私は、アカハチとの戦いに敗れた長田大主の要請によつて、仲宗根豊見親が応援に駆けつけたのではなく、仲宗根豊見親の先兵だつた長田大主が敗れたために、仲宗根豊見親は参戦したと考えています。

ところが、アカハチ戦争における仲宗根豊見親の思惑違いは、琉球国王軍も参戦したことであり、そのことが、祭金・知利良良の悲劇の原因ではないかと考えています。

★アカハチ戦争後の八重山の豪傑たちと宮古の豊見親

宮古の仲宗根豊見親は、多良間も含めて宮古諸島を支配下におき、更には造船や家屋建築用の材木の必要性から、西表島の島民

を酷使していた。それに対して、八重山の豪傑たちは、それぞれ居住する周辺地域を支配下におく程度であり、豊見親と八重山の豪傑たちの政治力や軍事力には大きな開きがあったというのを一五〇〇年直前の状況であつたと考えています。

そのような状況にあつて、アカハチと長田大主は、波照間から石垣へ出て來たが、それは彼らにとつて、石垣島が西表島に負けない新興の島としての魅力があつたからだと思われます。というのは、面積の広さと山があることは、西表島と同様の環境であるからです。

朝鮮人の漂流記（成宗王実録）にも、見られるように西表島の祖納と波照間との間に交流があつたことは間違いないことであり、アカハチや長田大主も、西表島のことは知っていたと考えられます。しかも、西表島は大竹祖納堂以来発展した先進地で、そこに慶来慶田城用緒がいたので、アカハチと長田大主は新天地の石垣島を目指したと思われます。

彼らが波照間島を捨てた理由は、面積が狭いことと山がないことが大きな理由だったと思われますが、その頃、波照間は当時の八重山としては先進地域だつたのではないでしょうか。いうのは、波照間の下田原貝塚や下田原城跡、ミシユク村やマシユク村の石積みの集落跡とされている遺跡がそのことを物語っているからです。（ただし、それらの遺跡については、私はまだ見ていません。資料で知っているのみです）

さて、石垣島に渡った二人は、宇大浜と字石垣にそれぞれの本拠地をおき、勢力の拡大を図つた思われますが、石垣島の西方に

は仲間満慶がおり、北には平久保加那按司がいました。一方波照間には、明宇底獅子嘉殿がおり、西表島祖納には慶来慶田城用緒、与那国島にはサンアライソバがいました。しかし、彼らは八重山全城を支配しようという強い野望を持つていなかつたと思われます。

ところが、彼ら豪傑たちは、宮古の豊見親が西表島にやつて来て島民を意のままに酷使しているのを見たり、聞いたりしたであろうし、そのような豊見親の動きは八重山の豪傑たちを刺激したと思われます。なかでも、豊見親の軍事力と政治力を目の当たりにした慶来慶田城用緒は、そのことにもつとも早く気づいたと思われます。しかし、彼は豊見親を敵に回すことができず、豊見親を後ろ盾として西表島を支配し、平久保加那按司を討つたのではないかと考へています。

そして、そのことに逸早く反応したのが、アカハチであり、アカハチは仲間満慶を討ち、明宇底獅子嘉殿を討つことになります。当時のこと想像するに、慶来慶田城用緒は舟で直接平久保半島に上陸したであろうし、またアカハチも陸路ではなく、大浜から舟で川平に上陸したと思われます。

このようなアカハチの動きは、長田大主にとつては脅威となるが、彼が単独でアカハチに対抗することは不可能であり、自然と慶来慶田城用緒との連携を図ることになり、更には用緒の影響力を持つていた仲宗根豊見親と連携することになつたと思われます。

これは八重山側から見た当時の動きですが、宮古側から見るならば仲宗根豊見親が西表の慶来慶田城用緒を通じて、八重山支配

を自論んでいたということになります。

更には仲宗根豊見親の背後には、強大な勢力が控えており、それが中山の尚真王であった。おそらく、仲宗根豊見親としては、独自に八重山を支配下に置きたいという野望はあつたでしょうが、中山を無視することはできなかつた。というのは、勢力の範囲の拡大を目指していた尚真王は、沖縄諸島及び奄美諸島はもちろんのこと、宮古、八重山を支配下に編入したいと自論んでいたと想像されるからです。

それで、仲宗根豊見親は、中山を無視することはできず、中山の先導役を果たし、その勲功によつて宮古、八重山を支配しようと考えたと思われます。そして、アカハチ戦争終結後、仲宗根豊見親の思い通りになり、次男の祭金を八重山の支配者にしました。しかし、実際の八重山統治が始まると、仲宗根豊見親の思惑どおりにはいきませんでした。祭金は奢れる者として譴責され、その後の知利真良豊見親も廃されることになりました。おそらく、その背景には、中山王府の意図だけでなく、八重山側の意図もあつたと思われます。

というのは、アカハチ戦争終結後、長田大主は古見大首里大屋子となり、用緒も首里大屋子（『慶来慶田城由来記』に記す西表首里大屋子か）となりましたが、八重山の支配者の頂点ではありません。それで、長田大主や用緒たちは、宮古からやつて來た余所者の頭を排除すべく、譴責したと思われます。しかも、八重山側のそのような思惑は、仲宗根豊見親の勢力拡大を嫌う中山王府にとつても好都合であり、それで中山王府は、知利真良を廃して

直接統治できる満挽与人を置くことにしたと思われます。

また、中山王府は、仲宗根豊見親系の力が増大するのを嫌つたので、仲屋金盛豊見親が悲惨な最期を遂げたのも、中山王府が関与したのではないかと思われます。

(5) 八重山は宮古や首里に対して、どのように対抗したのか

アカハチ戦争直前、首里には既に国家が成立していました。また、宮古が仲宗根豊見親を中心にもとまつていたのに対し、八重山は群雄割拠の時代であったという歴史認識から、私は八重山の群雄たちは一致して、宮古・首里に対抗しようとの意識はなかつたということを基本的な立場としています。従いまして、宮古側から見るならば、八重山の島々は、草刈り場のような状態になりました。竹富島も同じ状況であり、波座間も花城も仲筋も同様であつたと考えています。

そのような状況が、豊見親が西表島の住民を酷使したり、根原金殿や他金殿が豊見親の配下として働くことを容易にしたと考えています。また、それとは逆に、アカハチが長田大主と戦つたのは、八重山の統一がなされていないからであり、仲筋が親アカハチの態度を取つたりしたのは、竹富島でも一人の権力者にまとまつていなかつたからであつたと判断しています。

従いまして、八重山の豪傑たちは、八重山という領土の認識はなく、それぞれの思惑や都合で、宮古と連携したり、敵対したりしたと考えています。ですから、八重山は、宮古側から見れば、格好の草刈り場だったと思われます。

(6) 宮古軍の与那国遠征について

稻村賢敷氏の書き下し文の『宮古島旧記』には、与那国島の鬼虎は、宮古島狩俣の生まれであつたが、与那国島の商人が米一斗で買ひ取つた。そして、鬼虎は、成人して与那国の首長になつた云々とあり、それに続いて次のように記しています。

弘治年間八重山退治の時兵船を使はしてこれを攻めしむ。

しかれども兵船津口に入る能はずて空しく帰航す故に今玄雅に命じてこれを討たしむ、この時宗徒の勇士は嫡子金盛豊見親、二男祭金豊見親、三男知利真良豊見親、金志川金盛同人弟那喜九智、この人は後に金志川豊見親と称す、清兵二十四人、その外美人四人平良のろ住屋の大阿智、城のろ恋種つさ。伊良部のろ伊安殿うもい、砂川阿武俄麻相隨ふ

と記した後、「まず美人が宮古の窮状を鬼虎に語り、同情を湧き起させ、続いて玄雅が兵を率いて鬼虎に立ち向かうがうまくゆ

かず、玄雅は深田に倒れた。鬼虎が勝ち誇って笑つたところ、金盛兄弟と金志川兄弟が飛びかかるが退却する。再び玄雅が宝刀の治金丸で、鬼虎の右膝を斬りおとす」と記しています。

と記した後、「まず美人が宮古の窮状を鬼虎に語り、同情を湧き起させ、続いて玄雅が兵を率いて鬼虎に立ち向かうがうまくゆかず、玄雅は深田に倒れた。鬼虎が勝ち誇って笑つたところ、金盛兄弟と金志川兄弟が飛びかかるが退却する。再び玄雅が宝刀の治金丸で、鬼虎の右膝を斬りおとす」と記しています。

なお、私が「南島歌謡の研究」でユノントウイミヤーを仲屋金盛としたのは私の錯誤で、金志川金盛です。その理由は、宮古島の「金志川の金盛あや」及び黒島の「インシガーノの金盛ウンタ」であり、それらの歌謡では金志川金盛が与那国島に遠征して鬼虎を征伐したと歌つているからです。しかし、『宮古島旧記』では、玄雅（仲宗根豊見親）とその息子二人、金志川兄弟二人、神女四人などが二十四人の兵士とともに遠征したと記しています。

ところで、先生は、アカハチ戦争直後の与那国遠征がなかつと判断され、その理由として、「当時の与那国島の状況を把握していなかつたこと」「首里軍は参加せず、宮古軍だけ参加した」と、また、首里軍が遠征を指示（許可）したかどうかでない」を挙げておられます。その点については次のように考えています。

います。

38

朝鮮人の漂流記（成宗王実録）では、彼らが与那国から西表島祖納に移送されていること、西表島祖納には、大竹祖納堂が与那國島に遠征し、自分の領地にしたという伝承があることなどから、西表島祖納と与那国島との交流は深く、慶來慶田城用緒も与那國の情勢に明るかつたと思われます。したがつて、用緒の後ろ盾である仲宗根豊見親は、与那国島の情勢を充分に知り得たと思つてゐます。

それから、首里軍は、アカハチ戦争終了後、幾許も経ずして八重山を引き揚げたと思われますが、その後の八重山は宮古の祭金が統治しています。したがつて、首里軍が引き揚げた後、宮古軍を敢えて記しているところに、その部分の信憑性があると思つて

が八重山の人々（根原金殿や小浜の大嵩呉座や波照間島のウヤミシヤ赤多那など）を従えて参戦したと考えており、首里軍の指示（命令）のないまま、遠征した可能性が高いと考えています。その理由として考えられることは、宮古豊見親にとって、宮古軍は首里軍の配下にあるとは考えておらず、強力な友軍程度の認識だったと思われるからです。

よって、宮古軍の与那国遠征は、第一回はもちろんのこと、二回目においても、中山王の許可を得た可能性は少なく、そのようにして勢力拡大を図ろうとした仲宗根豊見親に対して、中山王は怒つたのではないかと思います。

(7) 玻座間御嶽と花城御嶽の神名について

一五〇〇年直前の竹富島は、島の内部で、仲筋対玻座間という構図があり、仲筋はアカハチ側で玻座間は宮古豊見親側だつたと考えています。しかし、仲筋は後に玻座間に圧倒されましたので、結局、竹富島は全体として、宮古の豊見親側になつたと考えています。ただしそれを論証すべき決定的な証拠は持ち合わせていません。

ところで、玻座間御嶽の代表である根原金殿、彼と行動と共にした花城村の他金殿について、私は「金殿」という名前だけで、彼らが宮古系統だと判断したのではありません。『ふんぬむとう』でも記したように、玻座間御嶽・花城御嶽の「神名」にその共通点を見出したからです。

そのことについて論じると、長くなりますが、結論だけ申し

ますと、「八重山島由来記」の神名やイベ名は、由来記の筆録者が作り上げたものではないかと考えています。

さて、その神名（実際はイベ名です）ですが、玻座間御嶽は「豊見をれん山」で花城御嶽は「豊見はなさう」となっています。豊見はご存じのように、宮古で使われている「豊見親」の「豊見」です。しかも、由来記の神名やイベ名で、「豊見」を冠する名は、竹富島の玻座間御嶽と花城御嶽以外では石垣島の宮鳥御嶽の「豊見たどらい」だけであり、宮鳥御嶽は長田大主が地盤とした登野城村・石垣村の発祥の地と言われる由緒ある御嶽です。

そのことから、私は、「豊見」を冠する御嶽は、宮古の「豊見親」と深い関わりがあつたのではないかと考えています。（ただし、由来記は用緒を祀った西表島祖納の慶田城御嶽については記しておらず、また長田大主を祀った石垣島の長田御嶽についても記していませんので、両御嶽の神名・イベ名についてはわかりません）

(8) 花城村の消滅について

「花城村の名称はアカハチ戦争後には消滅しているからです」という先生の指摘はもつともなことです。アカハチ戦争後直ちに消滅したのかどうかはわかりません。と申しますのは、『宮古八重山両島絵図帳』は、一六四七年頃に成立した（『ふんぬむとう』一四〇頁）と考えられますので、花城村は、必ずしもアカハチ戦争終結後直ちに消滅したのではなく、それ以後もしばらく存在していた可能性があると思っています。したがつて、大浜タナ

ジャラが、アカハチ戦争終結後に花城村を訪れることが可能だと思われます。

(9) フルスト原遺跡と花城遺跡の類似性について

フルスト原と花城村遺跡の類似性、もしくは波照間島の遺跡との類似性につきましては、私も聞いたことがあります。しかし、アカハチのグスクは、必ずしもアカハチ独自のものではなく、八重山共通のものだつたと考えるほうが妥当だと思われます。ただし、私が知り得た八重山のグスクで、現在残っているのは、上記の三箇所だけですので、断定はできませんが……。一般論として、そのように考えていています。

(10) アカハチ戦争前の竹富島の勢力関係

先生は、アカハチ戦争前の竹富島においては、アカハチ勢力が優勢だつたとお考えのようですが、私は波座間及び花城（波利苦・久間原地域も含む）等の勢力は宮古の仲宗根豊見親の配下で反アカハチ側であり、仲筋（幸本地域も含む）が親アカハチ側であつたと考へています。しかも、仲筋はそれほどアカハチに肩入れしていたわけでもなく、波座間・花城との対抗上、親アカハチ側にあつたと想像しております。仲筋はやや日和見的だつたのではないかと思っています。したがつて、宮古の豊見親がトウルングックを見張り場所としたり、トゥンナカーを掘つたりすることは充分できたと思っており、石垣島に一番近い竹富島が前進基地としても相応しいと思っています。

(11) 根原金殿の鍛冶伝承について

根原金殿が鍛冶伝承と関わっていることは、私も関心を持つています。しかし、鍛冶屋が人々から恐れられたとする伝承はその他にもあり、類型的な伝承だと思われます。また、竹富の鍛冶伝承は、根原金殿よりも、クルガニザーシのほうが知られているよう思います。

(12) 西塘捕虜説について

西塘が戦争に参加して捕虜となつたのか、それとも見世物的に連行された捕虜なのか、いずれも捕虜であることに変わりはありませんが、私は竹富島がアカハチ側で戦つたのではないとしていること、また、西塘の帰郷を一五四六年とされる先生の御説に賛成していることから、西塘の年齢を考えて、「見世物的な捕虜」と考へています。また、戦争捕虜としてわざわざ首里まで連行するならば、ある程度の武将やもつと屈強な大人であるほうが自然

また、種子取祭の伝承を根拠に、当時の波座間対仲筋の対抗関係を考えることは危険だと思っています。というのは、種子取祭の伝承は、竹富島の人々が干支で暦を理解できるようになつてから、生成されたものだと考へているからです。種子取祭伝承は、干支による暦の理解なくして成り立たないからで、それを理解できない人々がその由来伝承を語ることはないからです。私は種子取祭の由来伝承は、早くても十七世紀中頃から後半にかけて成立し、伝承されるようになつたと考えています。

であり、少年兵を捕虜として連行するほどの余裕はなかつたと思われます。

(13) トゥールングスクは祭金豊見親の居城だつたのか

トゥールングスクは、アカハチ戦争後、八重山の支配者になつた祭金豊見親の居城だつたというのが先生のお考えのようですが、私はアカハチ戦争の前に、見張り小屋として使われたのがトゥルングスクであったと考えています。その理由として居城としては敷地が狭すぎるということを先の書簡で述べましたが、先生はそのくらいの広さで当時としては充分だとのお考えを示されました。敷地の広狭については、それ以上議論することはできませんので、次の理由を挙げさせて頂きます。それは、トゥールングスクには石段がないということです。ンーブルにも、クースクにも、上るための石段がありますが、トゥールングスクには石段の痕跡は見当たりません。子供の頃、トゥールングスクには石段がなく、這うようにして上りました。そのとき石段が少しでもないのかと探し回りましたが、ありませんでした。これは私が中学生頃のことです。(もつとも石段はすべて除去されたと言つてしまえばそれまでですが……) 石段の痕跡も残つていなかつたという強烈な印象が今でも残っています。

以上のような理由から、トゥールングスクについては、グスクという名前はあるものの、祭金の居城であるとするのは、早計であろうと考えています。

(14) 種子取祭とビーヌカンについて

ビーヌカンが二種類あることは、私も既に述べてていることであり、先生のご指摘のとおり種子取祭のビーヌカンは「村のビーヌカン」です。また、西塘がビーヌカンを信仰した可能性はきわめて高いと思います。しかし、藏元やオーセーにビーヌカンを置いて、祭ることと、それを種子取祭の信仰の対象にするということは、同じではありません。というのは、西塘が国仲御嶽を建て、園比屋武御嶽の神を拝ませたのは、外来の神を新しい場所に、今來の神として祀つたからです。また、ムーヤマの神様の前で行なうべき種子取祭を、いきなりビーヌカンの前で行なうということは住民の抵抗に遭うと思われます。

したがつて、ビーヌカンの前で種子取祭を行なうことは、強い政治的力と用意周到な準備が必要であると思われます。

そのことと関連して思い出されるることは、小浜島のアカマタマターを土族たちが禁止しようとしたことです。その理由は、アカマターを拝むことで、小浜島住民は独自の神を保持することになり、その信仰を基盤として、土族の命令に従わないという可能性があつたからだと考えられます。

換言するならば、村のビーヌカンは琉球王の崇拜する太陽神であり、そのビーヌカンを土族も住民も信仰すべしとの宗教政策がありました。それに対抗できるのはそれそれの島の神々だからです。それゆえ、土族たちはビーヌカンの前で種子取祭を行なわせたのではないかと考えています。

しかしながら、そのような政策は、『八重山島由来記』成立当



種子取祭の舞台の芸能（弥勒）

時の八重山では、まだまだ重要だとは考えられていなかつたと思われます。そのことは『琉球国由来記』の八重山諸島の御嶽の神名・祭りの記述と、沖縄本島及び周辺離島の御嶽の神名・祭りの記述を比較してみると、はつきりします。というのは、前者の八重山では村のピースカンの記述はほとんどありませんが、後者では村のピースカンについてあちらこちらで記しているからです。

従いまして、それ以前の西塘時代において、ピースカンを種子取祭で祀ることは行なわれていないと思われます。おそらく、後世になつて、祭りにおいても、村のピースカンを祭神にしようと意識が士族たちの間で高まり、石垣島から赴任してきたユカルビトウがピースカンの前で種子取祭を行なわせるために、別々に分かれて行なわれていた竹富の種子取祭を統合したのではないでしようか。そのことについては、『芸能の原風景』でも述べておきました。

（平成十三年九月二十五日）

おわりに



シドウリヤニ（あう爺狂言）

昨年（二〇〇一年）二月、全国竹富島文化協会主催の「西塘とその時代」をめぐる諸問題について、およそ一年間にわたり議論を継続してきました。専門分野の異なる私たちの議論（論争）は双方にとつて刺激的で、多くの論点を浮かび上がらせるこことなつただけではなく、竹富島（八重山）の歴史と文化に関心を寄せておられる多くの先輩・郷友たちにも、議論すべき若干の問題を提示することができたのではないかと、確かに期待しているところです。

シドウリヤニ（あう爺狂言）

もつとも、往復書簡という形での論争ですでの、十分に学問的な手続きを踏んでいるわけではなく、

思いつきや思い込みで議論しているところもあり、またテーマも多岐にわたり過ぎて分かりづらいところもあるかと思います。加えてまた、提示すべくして提示していない問題も少なくあります。とか、なぜ石垣島へ移転したのかという問題も、十六世紀前半の竹富島（八重山）を含む琉球列島を取り巻く政治情勢、さらには東アジア全体の國際情勢を入れて検討すべき問題であつて、従来の歴史書の説明だけでは十分な説得力をもち得ないよう思えます。

往復書簡で提起した諸論点についても、共通理解に到達できた論点は少なく、今後とも論争を継続する必要のある論点が大部分です。今回、往復書簡を公表したのも、郷友・諸先輩をはじめ、多くの方々に問題を提起して検討して頂くことが趣旨ですので、忌憚のないご批判を寄せて頂ければ幸いです。

最後に、私たちの往復書簡を公表する場を提供して頂いた竹富町史編集室の皆様に、衷心より感謝申し上げます。

西里 喜行（琉球大学教授）
狩俣 恵一（沖縄国際大学教授）

収蔵図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。
あわせてお礼申し上げます。

寄贈者御芳名	受贈図書名	岩田書院	地方史情報 第41号
沖縄県公文書館	写真にみる近代の沖縄 写真による近代の展示目録	奎書店 古書目録 第38号	奎書店 古書目録 第38号
崎原恒新	八重山開拓文献・資料編目録	琉球大学附属図書館報 びぶりお 35巻	琉球大学附属図書館報 びぶりお 35巻
沖縄県立図書館	とうもーる 第52号	十周年記念沖縄・八重山文化研究会会報	十周年記念沖縄・八重山文化研究会会報
八重山分館	与那国町の家畜耳印・家判・カイダ一字 首里城普及書 御冠船踊	環礁 第10号 (最終号)	環礁 第10号 (最終号)
大城学	文化課紀要 第10号	琉球王国評定所文書 捕遺別巻	琉球王国評定所文書 捕遺別巻
並里区写真集	与那国島の祭事の芸能 波涛を越えて	西原町史 第六卷 資料編五	西原町史 第六卷 資料編五
岩田書院	並里区歴史写真集—世紀を越え未来へ—	西原町史 第六卷 附録	西原町史 第六卷 附録
竹富町議会	平成13年 竹富町議会会議録	歴代宝案 訳注本第13冊	歴代宝案 訳注本第13冊
沖縄県文化振興会	平成13年 竹富町議会会議録 第39号	沖縄大学地域研究所 所報 第25号	沖縄大学地域研究所 所報 第25号
沖縄県文化研究所	地方史情報 第40号	沖縄大学地域研究所 所報 第26号	沖縄大学地域研究所 所報 第26号
沖縄県公文書館	沖縄大学法文学部	平成13年 竹富町議会会議録 第7、8回	平成13年 竹富町議会会議録 第7、8回
沖縄県公文書館	琉球大学法文学部	1999年度 社会学実習Ⅰ・Ⅱ組報告 —沖縄における台湾引揚者の生活史—	1999年度 社会学実習Ⅰ・Ⅱ組報告 —沖縄における台湾引揚者の生活史—
沖縄県公文書館	琉球の方言	旧南洋群島と沖縄県人 テニアン 9	旧南洋群島と沖縄県人 テニアン 9
沖縄県公文書館	「歴代宝案」訳注本第13冊	空から見た昔の沖縄 10	空から見た昔の沖縄 10
沖縄県公文書館	琉球の方言	沖縄県史 資料編 14	沖縄県史 資料編 14
沖縄県公文書館	語注一覧表		

那 霸 市 史	三 木 健	竹 富 町 役 場	ゼロミツショニアイランドぱいぬ島 八重山開拓関係新聞目録（上）
		沖繩國際大學南島文化研究所以	地域研究シリーズ 第29号
		沖繩大學地域研究所	ひめゆり平和祈念資料館
		仲宗根政善	ひめゆり学園
		沖繩大學地域研究所紀要	沖繩大學の学生と埼玉県立上尾高校との修学旅行平和學習
		歴史と実践 第6号	平和を求めて 仲宗根政善の軌跡
		歴史と実践 第9号	沖繩大學地域研究所紀要 第16号
		歴史と実践 第15号	琉球大学の学生と埼玉県立上尾高校との修学旅行平和學習
		歴史と実践 第19号	沖繩大學の学生と埼玉県立上尾高校との修学旅行平和學習
		歴史と実践 第22号	沖繩大學の学生と埼玉県立上尾高校との修学旅行平和學習
		組踊への招待	沖繩大學の学生と埼玉県立上尾高校との修学旅行平和學習
		やいま情けに支えられ	沖繩大學の学生と埼玉県立上尾高校との修学旅行平和學習
		宮良長包「沖繩音楽」の先駆	沖繩大學の学生と埼玉県立上尾高校との修学旅行平和學習
		八重山、竹富町調査報告書 (3)	沖繩大學の学生と埼玉県立上尾高校との修学旅行平和學習
		300回例会記会誌	沖繩大學の学生と埼玉県立上尾高校との修学旅行平和學習
		八重山開拓関係新聞目録	沖繩大學の学生と埼玉県立上尾高校との修学旅行平和學習
那霸市史資料編 第3巻・2			

沖 繩 縣	三 木 健	那 霸 市 史	占領地の教育・文化に関する国際会議 宜野湾自然ガイド
		沖 繩 縣 公 文 書 館	沖 繩 縣 公 文 書 館 研究紀要 第4号
		岩 田 書 院	沖 繩 縣 公 文 書 館 年報 第3号
		金 城 印 刷	沖 繩 縣 公 文 書 館 年報 第3号
		北谷町史編集事務局	沖 繩 縣 公 文 書 館 年報 第3号
		ひ め ゆ り 平 和 祈 念 資 料 館	沖 繩 縣 公 文 書 館 年報 第3号
		浦添市立図書館	沖 繩 縣 公 文 書 館 年報 第3号
		豊見城村教育委員会	沖 繩 縣 公 文 書 館 年報 第3号
		沖 繩 縣 平 和 祈 念 資 料 館	沖 繩 縣 公 文 書 館 年報 第3号
		リ ス ト 教 文 化 研 究 所	沖 繩 縣 公 文 書 館 年報 第3号
		日本復帰30周年記念特別展	沖 繩 縣 公 文 書 館 年報 第3号
		資料に見る沖縄の歴史	沖 繩 縣 公 文 書 館 年報 第3号

祈念資料館	ひめゆり平和感想文集 ひめゆり 第13号
資料館だより 館報	第29号 第13号
宜野座村立博物館館報	第8号 ガラマン8
沖縄国際大学 南島文化 第23号	名桜大学 総合研究 第3号
宜野座村立博物館館報 第9・10回	名桜大学 総合研究 第2号
沖縄県議会 第16卷資料編13群島議会	名桜大学 総合研究 第4号
沖縄県議会史 第17卷資料編14立法院I	マラリア関係 略年表
沖縄県議会史 第16卷資料編13群島議会IV	西表島の気象49年
沖縄県公文書館 清代琉球関係桂案資料和訳目録	絵本 ほんとうにあつた動物のおはなし
沖縄県公文書館 沖縄県議会史 第17卷資料編14立法院I	リュウキュアユかえつてきてね
沖縄研究国際シンポジウム実行委員会 世界に拓く沖縄研究	八重山平和祈念資料館
増田昭子 雑穀の社会史 吉川弘文館 地方情報 第47号	土真鍋義晴 西表測候所 奎書店 古書目録 第41号

増田昭子 雑穀の社会史 吉川弘文館 地方情報 第47号
沖縄県議会史 第16卷資料編13群島議会
沖縄県議会史 第17卷資料編14立法院I
清代琉球関係桂案資料和訳目録
沖縄県公文書館 沖縄県議会史 第16卷資料編13群島議会IV

業務日誌

◆二〇〇二年（平成十四）

・第10巻資料編「近代2」編集のため、竹富島で聞き取り調査。
(職員二人、日帰り出張)

三月一日

・竹富町史(たより) 第20号掲載写真の撮影のため、竹富島へ日
帰り出張。(職員一人) アーバー石、トウンナカー、トゥール
ン ゲスクなどを撮影。

二月十八日

・「竹富町史(たより)」第21号を八島印刷へ入稿。

・第11巻資料編「新聞集成V」の文字打ち込み見本、グローバル
企画印刷(株)から取り寄せる。

二月十九日

・嘉手納町史の宮平友介氏、サツマイモ関係の資料収集のため来
室。

二月二六日

・竹富町台帳附属図複写製本請負契約を(有)総合コピーセンター石
垣と締結。

三月一日

・沖縄県地域史協議会二〇〇一年度第三回研修会(於・県公文書
館) 参加及び資料収集のため、職員一人出張(二日まで)。

三月四日

・町史編集室定例会議、三月の業務予定検討。

三月五日

・竹富町台帳附属図複写本、(有)総合コピーセンター石垣から納本。
・石垣金星編集委員、第10巻資料編「近代2」編集のため来室。
三月一四日

・ノート型パソコン(NB9/90R)購入のため、(株)オキジム八
重山支店と備品購入契約を締結。

三月三一日

・安里碩八室長、室長在職十二年間に終止符を打ち定年退職。三
月二八日、退職者激励会を開催(町役場主催)。

四月四日

・グローバル企画印刷(株)の小浜社長、比嘉部長、「新聞集成V」
編集打ち合せのため来室。

・「竹富町史(たより)」第21号、八島印刷から納本。

・里井洋一編集委員、第10巻資料編「近代2」編集のため来室。

四月五日

・コピー機レンタル契約を(株)オキジム八重山支店と締結。

・竹富町刊行物販売委託契約を新星堂、山田書店、村中書店、球
陽堂書房、榕樹書林、BOOKSじのんの六社と締結。

四月一〇日

・「新聞集成V」昭和三一年記事原稿の初校、グローバル企画印
刷(株)から送付。

四月一一日

・「新聞集成V」昭和三年記事原稿、初校業務を開始。

四月一二日

・平成一四年度区長会議、町史編集室の十四年度業務計画を各区長に説明。

四月二三日

・「新聞集成V」の文字入力点検及び資料収集のため、南風原町へ職員一人出張。

四月二六日

・第10巻編集専門小委員会開催。第10巻資料編「近代2」収録の『必要書』『必要書類集』の文字解説、体裁等を検討。

四月三〇日

・「新聞集成V」昭和三二年記事原稿の初校、グローバル企画印刷から送付。

五月一日

・新室長に銘里君夫町議会事務局長、異動就任。

五月二〇日

・三木健編集委員、第10巻資料編「近代2」編集のため来室。

・島根県在住の村田勇氏、第12巻資料編「戦争体験記録」を百冊購入。

五月二一日

・(社)温故学会(東京)から同会所蔵の古地図写真資料の第10巻資料編「近代2」への掲載許可頂く。

五月二十四日

・八重山地域史協議会二〇〇二年度定期総会開催。本年度事業と

して網取村調査を計画。

五月二八日

・「新聞集成V」昭和三三記事原稿の初校、グローバル企画印刷機から送付。

五月三〇日

・沖縄県地域史協議会二〇〇二年度第一回研修会(於・恩納村)参加及び資料収集(職員一人出張)

六月三日

・「新聞集成V」昭和三二年記事原稿の初校、グローバル企画印刷機へ送付。

六月一一日

・琉球新報の小那霸安剛記者、船浮要塞の構築等の取材のため来室。

六月一二日

・太平堂印刷専務(前城野印刷沖縄営業所所長)の益山健児氏、表敬訪問のため来室。

六月一三日

・琉球新報の小那霸安剛記者、船浮要塞に関する取材のため、再度来室。

・「新聞集成V」昭和三三年記事原稿の初校、グローバル企画印刷機へ送付。

六月一四日

・白浜の海神祭(ハーリー)の写真撮影のため、職員一人日帰り出張。

六月二十四日

・「新聞集成V」昭和三四年記事原稿の初校、グローバル企画印刷機から送付。

六月二六日

・白浜PTA家庭教育学級の招聘を受け、職員一人出張（一泊二日）。「白浜村の今昔」と題する講話を行なう（通事）。

六月二七日

・西表東部織物共同作業施設工房まんだーの落成式及び祝賀会を写真撮影（大富）。

七月二日
・「新聞集成V」昭和三五年記事原稿の初校、グローバル企画印刷機から送付。

七月二日

・石垣久雄編集委員、人頭税廃止一〇〇周年記念行事協力依頼のため来室。銘里室長、実行委員に発令。

七月三日

・台風五号接近、暴風警報発令のため終日業務停止。翌日午後二時三〇分、暴風警報解除。

七月八日

・住民福祉課から、「住民登録簿」「寄留民名簿」（写）「仮戸籍付表」の資料受け入れ。

・「新聞集成V」昭和三一年記事原稿の初校、グローバル企画印刷機へ送付。

七月一二日

・文進印刷の富村用助常務、表敬訪問のため来室。

・阿佐伊孫良編集委員から、竹富島関係の写真七枚借用。

七月一六日

・中村誠司（名桜大学助教授）氏、字誌調査のため来室。

七月一九日

・崎浜靖（沖縄国際大学講師）、仲田栄二（沖縄国際大学非常勤講師）の両氏、南風見の地籍図及び土地調査のため来室。

七月二六日

・銘里室長、人頭税廃止一〇〇周年記念事業に向けての第一回役員会に出席。

八月二日

・「新聞集成V」昭和三四年記事原稿の初校、グローバル企画印刷機へ送付。

八月一二日

・大城公男（鳩間出身）氏、鳩間島の集落形成及び米づくりに関する資料収集のため来室。

八月二二日

・小野沢あかね（琉球大学助教授）ほか学生ら、竹富町史の編集計画及び島々編の編集の取り組み、その他についての聞き取りのため来室。

九月五日

・恩田守雄（流通経済大学教授）、竹富町のユイに関する調査及び資料閲覧のため来室。

編集後記

◆『竹富町史だより』第22号を発刊しました。本号は、前号と同様に「西塘とその時代」論争・西里・狩俣往復書簡一を目玉に編集しました。さらに第10巻資料編「近代2」に収録した「必要書」を書いた崎原當貴の人物像について、曾孫の崎原毅氏からも玉稿をいたしました。原稿を読むと當貴の人柄が浮かび上がります。

◆「西塘とその時代」論争は、前号の（上）に続く（下）ですが、八重山歴史におけるアカハチ戦争、西塘、竹富島にあるトゥールングスク、種子取祭などをめぐつて、両者の見解が明らかになり、研究すべき多くの問題を提起しています。前号で（上）を紹介したとき、大きな反響を呼び、竹富島の関係者に限らず、多数の方々から問い合わせが寄せられました。（下）はいつも出るんだ」と、「月末だと」答えると「待てない。原稿があるなら、コピーをいただきたい」という人もいました。反響の大きさに驚いています。



平成14年9月30日発行

竹富町史だより

第22号

編集発行 竹富町役場町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地大和ビル2F東

☎ 09808-2-9985